
円城寺まどかの悪文排斥！

円城寺まどか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円城寺まどかの悪文排斥！

【Nコード】

N2128S

【作者名】

円城寺まどか

【あらすじ】

三流物書き、円城寺まどかが尊大な態度で小説を語る。スローガンは「悪文排斥」。良い小説、上手い文章とは何かを考察します。

第一回 はじめに

どんな世界にも「コーチ魔」という奴がいる。自分の實力は大したことなくせに、初心者を見つけては聞いてもいない講釈を垂れる。しかもその解説は解りやすいと言い難く、間違っではないのだけれども持って回った言い方をする。

「要はこういうことだね」

と一言で済むことを、要領と頭が悪いせいで延々一時間ぐらいかけて喋るのだ。小説に例えれば、原稿用紙五十枚で済む短編を、構力がないせいで二百枚かけて書くことに似ている。教える本人は気持ちいいのかもしれないが、こんな奴に教授される方はたまったものではない。

はつきり言つて災難以外、何ものでもない。

もちろん小説の世界にも「コーチ魔」は存在する。しかし本当の實力者、公募の選考に残るような人ほど低姿勢で、偉そうなことは一言も言わず、批判に対しても「勉強になりました」と、真摯な態度を見せる。そうして、ただひたすらに「小説を書く」。

本当に話をお聞きたいのはこういう方たちなのに、「いや、未熟者ですから」と、どこまでも奥ゆかしく、その奥義を語ってくれようとしなない。他者の小説には愛情を持って接し、長所を見抜く審美眼に長けている。

とてもかつこいいいし、憧れるが、凡人には中々真似できない。

反対に才能のない奴は、「俺のような天才の作品を理解できる奴など誰もいない」と、自分の作品は公表せず、他人の小説に対しては常になから目線で「ここが悪い、あそこがいけない」と、批判を繰り返す。しかもその指摘はほとんど挙げ足取り。

非の打ち所のない素晴らしい作品には、感想欄に誤字、脱字の指

摘だけを残す。まるで五百円の申告漏れを見つけた新米税務署員の如く自慢気に。

こういうことを、誰彼構わず手当たり次第にやる。

プロ志向でもない、ただ単に趣味で楽しんで書いているだけの人にまで「そんなことでプロになれるか！」と、自分がプロでもなくせに言う。

みんなでわいわいボーリングを楽しんでいるときに、

「今、ライン踏んだからファールだよね」

と、得意気に言う奴と同じだ。心が狭くて友達がいなくて、会社で決して出世しない。

そしてまた、実力がない奴ほど精神論が大好き。

「おまいにとつて小説って何？」

「小説ってのは文芸、文章の芸術なんだよ！」

「。。。最近の作品はさあ……」

小説に対する愛情はあるのに、才能には恵まれなかった残念な人得てして小説における「コーチ魔」は、こんな奴だ。非常にかっこ悪い。こんな大人になつてはいけない。

しかしこのエッセイの著者、「円城寺まどか」は、こんなみつともない大人である。尊大な態度で理論を語る。才能溢れる皆様、どうか嘲笑をこらえて読んでやってください。

第二回 視点ってなんだ？

まずは、小説の技術としては基本中の基本、視点について。

「視点って何？」とか言わないように。要は物語をどこから、誰の目を通して見ているのか。別の言い方をすれば、「物語における作者の立ち位置」ということです。映画のカメラワークとはちょっと違うので、映像をイメージすると勘違いの元となります。

小説においては、ひとつの事件を目の前にして、視点が違えば物語そのものが違ってくるといっようなかなが重要なものです。

えーっと、まず、視点というのは、大きく分けて一人称と三人称があります。（二人称というのもあるけど、普通は使わないからパス）。一人称というのは、「ぼくは〜」というやつで、読者は主人公として世の中を見ています。

利点としては、主人公により深く感情移入させられることと、視点の乱し方がないという点で初心者にとっても書きやすいこと。欠点は、主人公が嫌いな読者にとっては物語そのものに入り込めないことと、一人が見聞きする世界には限界があり、長い物語には向かないことです。

つまり、

『一人称は主人公が知覚すること以外、書けません』

じゃあ主人公がいない場合はどうするのだという人がいますが、馬鹿を言っちゃあいけません。

『一人称小説において主人公がいない場面など無い』

のですよ。だってあなたがこの世から消え去ることなどないでし

よう？ 気絶したり寝てたりしたら、世界のことはわからないのです。「ぼく」は、「ぼく」としてしか、世界を見ていません。

だいたい、より深く主人公に感情移入してほしいから一人称なのに、他者の視点に切り替わってしまったらそもそも一人称で書く意味がありません。

まあ、「表現の自由」なんて言葉を出されたら何も返せないのと、とりあえず「公募作品においてはこうした方がいい」という話に限っておきましょう。くれぐれも、主人公が気絶したら、あれれ三人称になっちゃった、という離れ業を演じてはいけません。（なぜ一人称と三人称の混合が禁じ手なのかについては次話にて説明します）

一元視点だの多元視点だのという言葉があるようですが、難しいことはよくわかりません。私にとって視点なんてものはあまりに当然のこととして身についているので。どうしてわからないのかわからないという代物なんです。

というわけで、実践でいきますね。シチュエーションとして、「なろう」における恋愛ファンタジーの金字塔、『センロノハテニ』より。カシアンがミハルに愛の告白です。

ちなみに作品の著者である日比谷碌樹先生の許可は取ってあります。

・カシアンの一人称

「え——？」

ミハルが驚きの声をあげて私を見た。

向けられた眼差しの中には、驚愕と恐怖、そして嫌悪の色が渦巻いている。彼女に青ざめて震えている私はどんなふうに見えたのか。その不安は激昂となり、私は思わず声を荒げた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

ミハル」

・ミハルの一人称

「え——？」

あたしはびつくりしてカシアンを見た。

カシアンの細い、整った顔は蒼ざめ、ひきゆがんでいた。その両拳がにぎりしめられ、わなわなと震えているのをあたしは見てしまった。ただならぬ雰囲気恐怖を感じ、思わずあとずさる。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

あたしは言葉を失った。

・三人称・神の視点

「え？」

ミハルが叫んだ。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめた。その両拳は堅くにぎりしめられ、かすかに震えている。ミハルは呆然と口を開いたまま、怯えた表情で一步あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂させたかと思えた。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

・三人称・ミハルの視点

「え？」

ミハルは思わず叫んでいた。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめていた。その両拳はにぎりしめられ、わなわなと震えていた。ミハルは恐怖と嫌悪を感じ、怯えて一步あとずさった。しかし、それがいつそうカシアンを激昂させたようだった。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

ミハル」

・三人称・カシ안의視点

「え？」

ミハルは叫んだ。

カシアンは自分が青ざめ、ひきつった顔をしているのをはつきりと感じながら両拳をかくにぎりしめた。ミハルが怯えたように一歩あとずさる。それは、カシアンに対する明らかな拒絶に他ならなかった。そして、それがカシアンをいつそう激昂させた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

一人称は問題ないですね。三人称を解説しましょう。

？ミハルは「怯えた表情」で一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させたかと思えた。」

？ミハルは「怯えて」一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させたようだった。」

？ミハルは「怯えたように」一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させた。」

？の三人称・神の視点の時は、全ての人物の内面に立ち入るか、誰の心理にも立ち入らず、外側で止まります。全ての人物に入り込むと、大抵は誰が誰だかわからなくなってしまうので、主人公を含めて外側で止まることを選択した方が無難です。

で、外側で止まると「怯えた表情」はどこからでも見えますし、激昂「させたかと思えた。」で、見ているのは作者と読者です。第三者には、他人の内面を断定することはできません。

？では、ミハルは「怯え」を感じた。しかしカシ안의激昂は、ミハルの目を通してしか読者には見えません。だから「ようだった」になります。

反対に？では、ミハルが「怯えたように」カシ안의目を通して見え、それがカシアンを「激昂させた」わけです。

《ミハルは怯えてあどさつた。それがカシアンを激昂させた。》

これが視点の乱れです。このシーンをいつたい誰の目を通して見ているのか、誰に共感すればいいのか、読者は混乱して「誰が誰だかわからない現象」を引き起こします。

この視点は、中・短編では変えてはいけません。一人称の作品は、たとえどれだけの長編でもダメです。

補足として、一人称で主人公のいない場面を書きたい場合は、『これはあとから知ったことだけど』とか、人から聞くなど、伝聞形にしておきます。ただ、これでさえ効果を計って使わないと物語が興醒めしてしまいます。

とにかく一人称である限り、その人のいないところは書けないし、能力以上のことは見聞き経験することはできません。

「三人称・人物視点」では、きちんと章立てし、その章ごとに視点が変わることは許されます。（ひとつの章の中で変わるのは避けるべきです）

この方法は、

・原稿用紙100枚以上の長編であること。

- ・ひとつの章で決して視点が乱れない、視点に関しての知識と技術を習得していること。
- ・主人公をはつきりさせた上で、完全に性格心理のくつきりした人物の書き分けができる筆力のあること。
- ・これを効果をはかって使える構成力のあること。

が、条件になります。また、主人公のいる場面は「三人称・主人公の視点」、主人公がいない場面は「神の視点」というのもOKです。

章立てごとに主人公が変わる三人称を「複数主格三人称」と言います。（流行の言葉で言うところこれが「多元視点」というやつでしょうか。）これが有効なのは、恋愛要素を含む小説で男女のすれ違いを際立たせるときや、その時々「決断」を描かねば面白くならない戦記物などです。

この「三人称・人物視点」は別名、「疑似三人称」とも言われ、事実上、一人称の延長でしかありません。「ぼく」や「私」を「彼女」に置き換える＋αで事足りるので、一人称が書ければ「三人称・人物視点」は容易に書けます。もちろん一人称と同じく「主格となる人物が知覚すること以外は書けない」というルールが適用されます。簡単である分、制約も多いです。

「事実上一人称である『三人称・人物視点』が、章立てごとに語り手を変えてOKなら、一人称だって章立てごとに主格となる人物が変わってもいいじゃないか！」

と言われそうですが、まさしくその通り。本来、これを良しとすると、その意見に反論できなくなってしまう。（だから本当の三人称ではないという意味で、「疑似」という否定的な言葉がつきます。）

ただ、一人称と違うのは、「主人公」語り手ではなく、第三者、

つまりは「主人公の目を通して語る別人」でありますから、読者に違和感を与える事実はあるにしても、その立ち位置を変えることは許されるのです。（その条件は前述した通りです）

もつとも難しいとされる「三人称・神の視点」。（または「純正三人称」）

神の視点が難しい理由として、人物の心理がそのまま書けないということが挙げられると思います。しかしながら、「内面に入り込まないと心理は描けない」は誤りで、「まるで。。。と言いたげに」や、「さも。。。と言わんばかりに」という推察+表情や行動で、いくらでも描くことができます。

さらにはこれに台詞が加わることで、充分すぎる心理描写が可能です。（もつとも、これを可能にするためにはかなりの筆力を要しますが）

これは一人称においても重要なことで、初心者の一人称小説にありがちな「主人公が他者への感心が無く、キャラクターがただの記号と化している」ということを避けるためにも必須の技術です。

神の視点は、物語との距離感と言いますが、誰に対しても同じ立ち位置で語るため、主人公のいない場面でも読者に違和感を与えることがあります。別の言い方をすれば、神の視点とは「私は」と名乗らない作者の一人称とも言えます。

というわけで、あまりの上から目線にさつそく皆様の不快感が募ってきたようなので、一旦この辺りで終わりにします。今回は人称と視点の続き、「なぜ一人称と三人称を混合してはダメなのか」を尊大に語ります。

第三回 混合人称はなぜダメか

一人称と三人称を混合してはいけません

ラノベを筆頭に混合人称の作品が溢れる昨今、こいつは何を言っているんだと思う方もいるでしょう。実際、ラノベ作家を養成するスクールでも「混合人称、および章ごとに語り手が変わる一人称はOK」と教えるらしく、古くから小説に親しんできた者は戸惑うばかりです。

私としては、せっかく高い志を持ちながら、どうかそんな低レベルな現状に迎合しないでほしいと願うばかりですが。

なぜ混合人称はいけないのか。なぜそこまで否定するのか。

説明しましょう。

小説というのは、読者が手に取った瞬間、作者との間に暗黙の了解とも言えるある契約をかわします。それは、

『読者は作者が提示した設定を無条件で受け入れる』

ということです。この契約をかわすことによって、小説は小説として成立します。

一人称が始まる、つまりは読者に、「あなたはこの世界の主人公ですよ」と言っておいて、突然視点が変わる、別の人格になるなんていうのは、読者に対する一方的な裏切りになります。

現実の世界だって、「自分」として生を受けながら、その生をまっとうしようと一生懸命生きてきたのに、もしもある日別人になってしまったら神を恨みますよね。これは魂が別人に乗り移ったのは違って、人格も別人になったらと考えてみてください。そんな不条理は許されないのです。そして、そんなことは決してあり得ません。それが「筋」というものです。現実の世界だって小説だって、

一番大切なことは「ちゃんと筋が通っている」ということです。一人称で始まっておきながら突然別人の視点に切り替わってしまうという筋の通らない作者の裏切りに対し、読者は「わからない。理解不能」をもって答える以外にありません。（普通はね）

つまり、章立てごとに語り手が入れ替わる複数主格一人称や混合人称は、小説として成立しないのです。

もうひとつ心情的な理由を挙げるなら、読者はそんな都合のいいものではないということでしょうか。

小説を綴る「言葉」というのはなかなか不便なもので、作者のイメージは読者に百パーセント伝わりません。よく言われることですが、同じ景色を見て、みんな同じように「美しい」と言ったとしても、その感動をそのまま表す言葉、「どう美しいか」を表現することとは不可能です。

「言葉はまるで六色のクレパスのよう」とは、某直木賞作家の言葉ですが、文章というのは、どうしても誤解や齟齬を生んでしまいます。そこを読み解くのも小説の面白さのひとつなのですが、語り手はなるべくわかりやすく、誤解のないようにイメージを伝えなければなりません。比喻もそうですが、視点だって読者にわかりやすく伝えるための技術なのです。

その技術は昨日、今日できあがったものではなく、先人たちが「どうすれば読者に自分のイメージを正確に伝えられるか」を、試行錯誤して確立されてきたものです。それをやってみようともしない、できもしないうちから「小説にルールなどない」と否定し、表現の自由を標榜するのは、あまりに横着、思い上がりすぎるのではないのでしょうか。常識の無い人に常識を打ち破ることはできませんし、基礎がない人に、基礎以上のことはできません。

凡人には理解不能の絵を描くピカソだって、基本のデッサンは誰よりも上手いのです。

また前述のとおり、そもそも客観記述であつてもいくらでも内面

を描写することができないのに、なぜわざわざ読者に違和感を与えてまで視点を変更しなければいけないのか。単純に自分の技術不足を糊塗しているだけのように思えて仕方ありません。

実際、混合人称が（少なくともラノベにおいて）許されるようになったしまった背景には

「ラノベしか読んだことのないラノベ作家に統一人称で書けと言ってもできない」

「読者も客観記述から内面を推察できる『読み解く技術』がない」

「もはや誰もそんなことを求めなくなった」

という経緯があるようです。

そんなことを言っただって、私はあの人の気持ちも、この人の気持ちもわかって欲しい。そしてすべてをひっくり返るめて私の小説世界に共感してほしい。

……その心情はわかりますが、無理です。読者は物語のたった一人に感情移入することにより、共感と理解を深めます。あれもこれも詰め込んで、結局何も伝わりません。作者が思っているほど都合良く、読者は心を動かしません。だから混合人称は論外にしても、三人称であつてさえ視点は（せめて初心者のうち）ひとつに統一した方が無難なのです。

こういうことを言うと、「プロはやっている、そういう小説がある」という人がいますが、すでに評価の固まったプロと、これから一作、一作が世に認められるかどうかを問うアマチュア作品は別物です。

それこそ「小説にルールはない」わけで、上手い人は何をやってたっていいんです。

「三人称・神の視点を含め、客観的に心理を描写するなんてできない。難しいし、面倒くさい」

これが混合人称を使う人の本音ではないでしょうか。

とは言っても現実には低きに流れ、プロでさえ「三人称・神の視点」
が書けない人がいるようです。実際、出版されている小説のほとん
どが、――さすがに一般文芸において混合人称はないにしろ――「
三人称・人物視点（複数主格）」ですし。

そう考えると、この理論はもはや時代錯誤なのかもしれませんね。

第四回 プロっぽいと言われる文章

今さらですが、このエッセイの方向性として、小説における文章を考察してゆこうと思います。「プロットの立て方」や、「面白いストーリー」、「伏線の張り方」というのは、このエッセイでは触れません。円城寺まどかはストーリー作りに不自由な人なので、そういうものは逆に教えを請いたいぐらいです。

さて、その小説における文章ですが、日本では識字率が高く、文字が書ければとりあえず文章が書けるせいで、「小説なんて誰でも書ける」という誤解がはびこってきました。

特に最近はその技術がないがしろにされ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」という風潮があるようです。

しかしながら、小説を書くには技術が必要ですし、誰でも書けるものではありません。「プロ作家」という職業があるとおり、難しいからプロが存在するのです。誰でもできるようなことにプロは存在しません。

ことに小説のプロは、相撲や将棋の世界と同じく、「どんな一流のアマチュアも、その技術は決して三流プロにはかなわない」のであります。（最近はそうでもないかな……）

小説において文章は、大切な要素ではあるのだけれども絶対ではありません。ゴルフに例えるならドライバーショットでしょうか。飛ぶに超したことはないし、飛ばばプレーの幅が広がるし、華がある。けれどもスコアとは関係ない。小説では、文章が上手ければ何かと便利だし、文章力がない人よりは、あつた方が執筆はずっと楽になります。けれども文章の上手い小説が良い小説ではないし、文章のヘタな小説が悪い小説でもありません。

ただ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」と主張する人の小説が面白かった試しがないことも事実です。
なぜでしょう？

例えば空前絶後のストーリーを思いついたとして、それを伝えるためには最低限のリアリティというものが必要になってきます。それがあり得ないような話であればあるほど、リアリティを持たせるための文章力は高いものが求められるのです。（だから現実にはあり得ない世界のSFやファンタジーは、エンターテインメント小説として最高に文章力を求められるジャンルなのです）

なぜ小説にリアリティが必要なのか

先程も申しましたが、リアリティの感じられない世界に、誰も自分の身に置き換えて共感しないからです。このご時世に大変恐縮な話題ではありますが、「大地震の恐怖」という話であれば、誰がどのように書こうと、現在ならばいつ自分が被災してもおかしくないリアルな話として、自分のこととして恐怖を感じます。

しかし、これが「宇宙人が侵略してくる」という話ならどうでしょう。確かに物語としては面白いかもしれないけれど、いったい誰がそんな話を我が身に置き換えて「怖い」と感じるのでしょうか。

これを「大地震の恐怖」と同じレベルで感情移入させるには、それこそ並大抵の文章力では不可能です。つまり、いくら素晴らしいストーリーを思いついたとしても、それを小説で表現したいのなら最低限の文章力がなければ誰からも見向きはされません。

ちなみに物語において「もっとも面白い話」は、「もっともよくある話」であります。面白いからあの手この手で語られ、よくある話になってきました。しかしながらこういう決まり芝居を、「もっとも面白い話」にするためには、独創的な物語を書くよりもずっと高いレベルの技術が求められるのです。

というわけで、繰り返しになりますが小説において文章は絶対ではないけれども大切な要素です。物書きならば誰もが卓越した文章力を身につけたいと思うのですが、残念ながら世の中には「文章の上手い人」と「文章のヘタな人」が存在します。どうすれば上手い文章が書けるのか。

誤解を恐れず衝撃的なことを言いますが、

『文章は才能が大きく左右するので、本質的に上手くなりません』

「そんなことはない！」

「修練すれば絶対に上手くなる！」

きつと皆様そう思われるでしょう。私もそのように信じていました。でも文才というのは生まれ持った才能、センスであって、容姿と同じで美男、美女もいれば、どうしてもその……という人もいるのです。上手い人は最初から上手いし、センスのない人はいくら修練を積んでも——もちろんそれなりの上達はあるにしろ——いつまでたっても垢抜けません。

華やかな文章が書ける人、センスのある言い回しや比喻の使える人、文章の絶対音感を持ち、リズム良く的確な描写のできる人。これらはみんな才能で、文才に恵まれない人が同じように真似しようとしても無理なんです。いつだって神様は不公平です。

だいたい、文才のある方というのは私がこのエッセイで述べるようなことは最初から知っていて、

「円城寺は当たり前前のことを何を偉そうに言っているんだ」
か、もしくはせいぜい、

「私が漠然と感じていたことはこういうことだったのか」

ぐらいに思っていることでしょう。（あ、私が上手いと言っているわけではありませんよ。ただ理論武装しているだけですから）

といってあきらめるのは早計。容姿だって、自分に似合う化粧やファッションでいくらでも取り繕えるように、文章だって「ヘタな部分の隠し方」というものがあります。それに、先程も申しましたが「文章の上手い小説が良い小説」ではありませんので。

「文章が……」と言われる人は、自分の弱点を知らないだけなんですね。そしてそれを取り繕う術は案外簡単だったりします。それは本当に知っているか、いないかだけの些細なこと。誰もが簡単に「プロっぽい」と言われる文章が書けるようになります。（当然ながら「プロっぽい」というだけでプロの文章が書けるようになるわけではありません）

それではさっそく、前回同様、上から目線でいきます。とりあえず文章の「身だしなみ」を整えることにしましょう。人様に小説を読んでもらう、人前に出るわけですから身だしなみは大切です。

『文章は見た目と中身がよく似ている』

という格言があります。人を見た目で判断してはいけないと言いますが、人間だって案外見た目と中身は乖離しないものです。

文章も同じ。

一文ごとに改行する箇条書き、

無駄な改行や

一行空きを乱発するスカスカの文章は

中身もスカスカ。(こんな感じ)

反対に、段落の少ないぎゅっと詰まった文章を書く人は、純文気取りの難解な文章を連ねている。

もちろん効果をはかって、あえてそういう書き方をする場合もありますが、とりあえず「文章が……」と言われるような人はやめた方がいいです。

だいたい、一行空きの文章が読みやすいなんて勘違いするのは普段から小説を——まともな小説を——読んでいない証拠ですからね。

それから、一般的な表記原則を守ること。さいわい「なるう」には多くの指南書が存在し、その多くが原稿の書き方を説明していますので、すでにご存知の方も多いと思います。軽く復習しておきましょうか。

- ・書き出しは一行空けて二行目から。
- ・改行後は台詞も含め、一マス空ける。(注1)
- ・『――』、『……』は、二個一セットとして使用する。
- ・『？』、『！』の後は一マス空ける。
- ・台詞の最後の「。」は不要。

こんなところでしょうか。まあ、これを言うとき必ず「そんなルールはない」という人もいますけどね。

でも、ルールと言われるものは確かに存在します。「戦後出版業界表記原則」ともいうべきルールが。前述を含め、『当て字、難読漢字の使用を避け、接続詞、基本名詞、基本代名詞、副詞はひらがなで』というものです。

「どこにそんな記述があるか」って？ ありませんよ。物書きを

自認する者にとっては「常識の範疇」ですから。

人に会ったら挨拶をする。

食事中、喋りながらものを噛まない。

公共の場で騒がない。

こういう事柄に対し、「そんな法律どこにある」って言っているのと同じです。

「俺は別に出版するつもりはないし、そんなことを言われる筋合いはない」

という方もいるかもしれませんが。しかし出版するかどうかはともかく、たとえweb掲載であろうと、「読んでもらうために」投稿しているわけですよ。読んでもらいたいなら、ルールを守り、礼節をわきまえ、「どうか読んでください」と作品を差し出すのが道理ではないでしょうか。

すみません。話が逸れました。

少し補足しますと、「程」^{ほど}、「等」^{など}、「様」^{よう}は、基本的にひらきます。ひらがなにすることを「ひらく」と言います。「兎に角」、「折角」なども今さら漢字で書いてはいけません。

もちろん、時代物などで演出効果を出す場合などはこの限りではありません。これを含め、表記原則を破るのが許されるのは

・説明できるだけのちゃんとした理由があり、

・それが自己満足に終わらず確かな効果をあげていると認められる。

という場合です。

無駄な行空きをなくした上で、これら表記原則を守り、段落をこまめにつける。段落は原稿用紙一枚につき四つが目安ですね。でき

れば五つか六つ。これ以上だとアマチュアの記事は密度が薄いので、読みやすいを通り越して薄っぺらい文章になってしまいます。

これだけで、見た目はずいぶんとプロっぽくなったのではないでしょうが。

前回の視点でも申しましたが、けっきょくこれらは読みやすく、伝わりやすくするためのルールですので、自らを天才と自負している人以外は守った方が無難です。

今回はあまり大したことは書けませんでした。すでにこんなことは出来ていて、退屈な話だったという方もおられるでしょう。次回は「描写」について語ってみます。

第四回 プロっばいと言われる文章（後書き）

（注１）・製本されたとき、カギ括弧が天から（一番上のマスから）始まるか、一マス空いているかというのは出版社ごとに異なる校正規則の違いで、本来は原稿は例外なく一マス空けるのが基本でした。しかしながら、現在ほとんど出版社において「台詞は天から」に統一されており、原稿も台詞は一マス空けなくてもよいというのが主流です。私は古い人間なので空けています。

第五回 それは小説ではありません

『円城寺まどかの悪文排斥!』第五話でございます。今回は「描写とは何か」について語ります。

まずは私の新作小説からご覧ください。

ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。学校が終わったある日、ぼくは家までの道を急いでいた。しかし、途中で工事現場に遭遇したのでいつもと違う道に行くことにした。

するといつの間にか、知らない道を歩いていることに気づいた。ぼくは少し悩んで、今来た道を引き返した。

しかし、どこまで行っても知った場所に出ない。

焦ったぼくは通りすがった男に道を聞いた。

「すみませんA……町に行くにはどうすればいいですか？」

「……を右に曲がれば行けるよ」

肝心なところが聞こえない。しかし、聞き直そうとしたら男はもう立ち去っていた。

ぼくは再びあてもなく歩き出した。しばらく知らない町をさまよっていたが、ついにA……町にたどり着くことはなかった。ぼくは疲れて、その場に座り込んでしまった。

気がつくと、いつの間にか日が暮れている。

……いきなりの駄文で申し訳ありません。なんとなくホラー仕立ての物語。さて、この文章を読んでどう感じたでしょうか。

読みやすい？ 単調な文章？ なかなか味わい深い？ ヘタくそ？ 感じ方は人それぞれです。しかし、少なくとも「上手い」とは思わなかったはず。どこがヘタくそなのでしょう？

お分かりの方も多いと思いますが、実はこれを「小説」とは言いません。こんなものは小説以前、ただの「あらすじ」です。こんな文章に、上手いもヘタもありません。

どこがどう、なぜこれが小説ではないのか。わからないという人はちよつとヤバイですよ。

なぜなら、

『説明ではなく、描写をしないと小説にはならない』

ということがわかっていないからです。これは小説を書き始めたばかりの人がやりがちな、「あらすじ小説」なんです。小説の骨組みだけ。これに肉付けし、血を通わせないと小説にはなりません。こんな書き方をしたら、歴史の年表だって小説になってしまいますよ。例えば――

昭和六年、日本は中国の排日運動と経済的大恐慌を解決するため、満州事変を起こし、翌年中国北部を分割し、満州国を建国した。さらに昭和十二年、日華事変に突入。中国侵略への泥沼戦争に突き進んでいった。

これに対し、中国は共産軍と蒋介石のひきいる国民政府との内乱を一時中断し、一致団結して排日運動に立ち上がった。

日本は石油などの資源を必要とするため、昭和十六年、日本軍は仏印に侵略し支配下におさめた。

……ね、こんなものは小説じゃないでしょう？ これと同じ書き方をしているのが、私の書いた小説（と思って書いたあらすじ）です。

冒頭の「ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。」なんて一文はもっともいけない。平凡な高校生ならば、平凡であることを描写しなければ小説にはなりません。

ではどういう書き方が描写なのか。

お手本として、立川マナ先生の『鈴木君の平均的な非日常』というコメディ小説から、平凡な高校生、鈴木君を描いた一文を紹介します。もちろん立川先生の許可は取っております。

（中略）

平均といえば、彼の見た目もそうだ。保健の教科書に描かれるイラストのような、一般男子の体系。中背中肉。顔は目立つわけでもなく、かといって、ブサイクでもない。おそらく、ランダムに三十人ほどの男子生徒の顔写真を用意して、その平均値を割り出せば、彼の顔になるだろう。似顔絵が描きづらい顔、といえば分かりやすいだろうか。とにかく、特徴がない。だから、なかなか覚えてもらえない。それなのに、しょっちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

（後略）

これは私が絶賛した一文です。いやー、上手い。お見事！

どこが上手いのか。

コメディならではの軽快な文体はもちろんですが、しかし私が感心したのはそこではありません。特徴がない人の特徴として、「似顔絵が描きづらい顔」だとか、「なかなか覚えてもらえない」ということは、案外多くの人が思いつくことでしょう。しかし、

それなのに、しょっちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

これがすごい。これは思いつかない。少なくとも、他人を遠ざけるような生き方をしてきた私には決して思い至らない。

美男子は美男子の苦労があるように、ブ男にはブ男の苦労があるように、どこにでもいる平凡な顔の「鈴木君」にも、よく誰かに間違えられるという苦労がある。そこに気づく立川先生の人間に対する洞察力と想像力。

この効果は絶大で、学園コメディであるはずの小説世界が、この一文のおかげで確かなりアリティを持って感じられるようになるんです。

私がこれ以上のものが書ける自信がなかったので、お手本に引用させていただきました。

こう書かないと小説にはなりません。私が書いたものを読んで、すぐに「これは小説じゃない」と見抜けなかった人。あなたの小説も「ただのあらすじ」である可能性があります。

抽象的な言い方になりますが、小説の文章は、そのものずばりを言い表してはいけません。核心を突いた言葉で世界を広げるのが短歌や俳句なら、小説の文章はその対極に位置します。現実と小説世界の溝を埋めるように、丁寧な言葉を敷き詰め、核心を浮かび上がらせる。それが小説における描写です。

私の書いたものと立川先生が書いたもの、どうしても違いがわからないという方は、とりあえず百冊ほど小説を読んでください。でないと、これから先、あなたの書くものはすべて「あらすじ」でしかありません。

もちろん全部を描写してゆくと大変なことになるので、説明で済ませてしまう部分というのはあります。次回はそのあたりを、「どれだけ描写するべきか」を考察します。

第六回 描写肥大という病気

『悪文排斥！』第六回。今回は「あらずじ小説」とは反対、贅肉のつきすぎた肥満小説について語ります。

実はこのエッセイを始めてから、何を、どこまで描写すればいいのか解説してほしいというご意見を数名からいただきました。リクエストは受け付けておりませんが、そういう方の参考になれば幸いです。

「何をどこまで書くべきか」

おそらくこれも、小説を書き始めた人の多くが悩むことだと思います。

そこで、今回もひとつ悪い例を出します。あ、これはもうひとりの私、矢岳秀斗が書いたものです。

「何だつて！」

ぼくは驚き、座っていた椅子からはじかれたように立ち上がった。その勢いで、グレーに塗られたスチールフレームに薄い木板を張っただけの椅子は、その値段と同じぐらいの安っぽい音を立てて床に転がった。掃除したばかりの綺麗な床に、わずかについてしまった傷がやけに目を引く。でも、ぼくも彼もそんなことを気にしている場合じゃなかった。

「すぐに行こう」

ぼくはまず右足の筋肉に力を入れて足を床から持ち上げると、前方に出して五十センチほど先の地面を踏みしめた。それと連動させ、右腕は肘を曲げて後方に振る。もちろん左腕は前だ。前方の地面をとらえた右足に力を込め、こんどは左足を持ち上げる。それを右足

より前に出し、合わせて腕の動きも逆に。繰り返すその動きは速くなり、一瞬両足は宙に浮く。

ぼくは走っていた。すれ違う十人ほどの生徒が、驚きの表情を浮かべて振り返る。階段を一段とばしに駆け下り、一階へ。降り立った廊下を右へ三十メートル行き、突き当たりを左に折れる。すでに誰もいないはずの体育館に、ぼくは急いだ。

……（絶句）……

アホかい！　こんなものは――

「何だって！」

ぼくは驚いて立ち上がった。その勢いで椅子は転がり、乾いた音を立てる。

「すぐに行こう」

言うが早いか、ぼくは教室を駆けだしていた。すれ違う生徒が、何事かと振り返る。

でもそんなことに構っちゃられない。ぼくは誰もいないはずの体育館へと急いだ。

で、済むぢやないかつ！

……失礼しました。

しかし笑ってはいけません。実はこういう書き手が意外に多いのです。しかも確かに長い描写を支えるだけの記述体力もあり、よく

小説というものを知らない読者からは

「豊富な語彙と圧倒的な文章力に驚きました！」

と、感嘆符をつけて褒められたりするものだから、なかなか自分がそういう書き手であるとの認識がありません。

前述の悪い例では、転がった椅子が高いか安いかなんて関係ないし、床についた傷がのちの伏線でもない限り、どうでもいいことです。

後半の走る描写など論外。『まず右足を持ち上げ、それから……』なんて、主人公がこのあと空でも飛ぶのでなければ、明らかな過剰描写ですよ。まるで『キャプ。ン翼』のスローモーションじゃないですか。

こういう人の小説は、無駄を省けば半分、ヘタをすれば三分の一の分量で書けてしまえます。長編を書いているのに、実はそれは本来、短編のネタだったということに気づいていません。「あらずじ小説」と同じく、これも小説にはならない。

おそらく、小説をパソコンで書くようになってしまった弊害でしょう。どんな長い文章も楽に書いてしまうものだから、とりあえず全部書いてしまう。三百枚、四百枚の原稿用紙に立ち向かい、そのマスをひとつずつペンで書いて埋めてゆく、という経験のある方々には、あまり見られない傾向です。

もしあなたが、

- ・短編が書けない、もしくは苦手。
- ・公募に挑戦はしてみたいけど、俺の小説のスケールは規定枚数には収まらないぜ！
- ・書き出した小説が一向に終わる気配を見せない。（最初から大河小説として書いているなら別です）

の、どこかに当てはまるのであれば、あなたは間違いなく無駄な描写を連ねています。

こんな書き方をしていたら、小説なんてどんどん長くなってしまいますよ。そりゃ短編なんて書けるはありますがありません。

またこういう人に限って、肝心なところを説明で済ませている傾向があります。描写しなければいけないところなのに、前述の「ぼくは平凡な高校生だ」という説明になっている。

説明と描写が逆になると、実際の原稿枚数よりも物語が長く感じます。どれだけ描写を連ねても淡々としてしまふ、というのもこれが原因です。読者が何を知りたいのか、与えるべき情報は何なのか、理解しないまま執筆に入るから何もかも書いてしまふんですね。

本来は小説のネタを掴んだ瞬間に、「これは原稿用紙〇枚の話」ということを把握しなければなりません。それがわからないという人は、まずはきっちり五十枚で終わる短編を十本ほど書いてみましょう。

五十枚の短編に、無駄な描写を書ける余裕はひとつもありません。一語一句だっておそろかにはできない。この一文は必要か必要でないのか、見極めるための練習になります。

たしかに長編であれば、多少の無駄を交えて枝葉を茂らすということも必要ですが、基本的にはなぜこの描写は必要なのか、説明のつかないことを書いてはいけません。

執筆はもつと神経質に。トッププロともなれば、描写はもちろん、どうしてここは「。。。だった。」ではなく、「。。。であった。」となるのかについても説明ができるほど、文章の隅々にまで気配りを行き渡らせています。

無神経なままで小説は書けません。文章には、神経を使いすぎるぐらい使ってちょうどいいのです。

しかし、前述の「あらすじ小説」は、けっこう簡単に治りますが、「描写過多」の修正は、かなりやっかいだと思います。なんせ文章

のダイエットですから。いつだって、太ることより痩せることの方がずっと大変なのです。

短編と長編では確かに違う部分もありますが、短編が面白い人は長編を書いても上手いです。短編が書ければ長編は書けます。小説が上手くなるためにも、短編の執筆はお勧めです。

どうしても描写の取捨選択がわからないという人は、自分の崇拜する作家の小説を書き写してみましよう。もちろんコピペじゃないですよ！

文章の鍛錬はもちろん、「何をどれだけ書くべきか」がわかると思います。同じ文体になると恐れる人がいますが、自分がそう思うだけで、第三者が読めばまったく別物です。決して同じにはなりません。（一冊書き写したぐらいでプロの文章が書けるわけがない）私が誰の文章をお手本にしているかだって、おそらくわかる人はいないはずです。

次回ももう少し描写について。「どのように描写するのか」を考えてみたいと思います。

第七回 円城寺まどかがナンボのもんじゃい！

『悪文排斥！』第七回。今回は予定を変更して、このエッセイの著者である円城寺まどかの実力を公開したいと思います。

執筆歴一年半。公募にも挑戦しておりますが、結果は残せていません。何が足りないのか、自分でも感ずるところは多々ありますが、一度プロの意見を聞いてみよう、と、公募の選考経験もある編集者に作品を見てもらったことがあります。

この経緯は自身の活報でも一部を紹介したことがあるのですが、今回は完全ノーカット、言われたことの全てを掲載します。

今まで散々上から目線の講釈を垂れてきましたが、たまには徹底的に叩きのめされる円城寺まどかを見て、溜飲を下げてください。

批評を受けたのは拙作『かいな』です。

<http://ncode.syosetu.com/n1131n/>

批評されるのは大きく分けて記述、人称、構成の三点。各項目では『』のついていところが私の評価です。それでは行きます。

●記述面について

文法精度が確保された安定感のある日本語です。

・ところどころ品詞の重複、主語と述語の不整合、能動態と受動態の混在、文意の飛躍および断片などが見られます。

問題ありません。違和感を誘われる読点利用が皆無なのは、作者が十分な「構文解析力」をお持ちだからだと思います。また、漢字の使い分けも水準をはるかに上回るレベルで、作者の丹念に辞書を引く姿勢が窺えます。

ただ、たぶん二カ所だけ「主述不整合」と考えられる記述が見られました。この「文章冒頭に『。』は』を配置しながら、それを主語として扱わない書き方」は、力不足の書き手の特徴とも言えますので再確認してください。

×空はどんよりとした灰色の雲が覆い尽くしていた。
。どんよりとした灰色の雲が空を覆い尽くしていた。

×平日のこんな時間に家にいることは、奇妙な解放感と、まるで社会から取り残されたような孤独感が入り交じった、奇妙な気分だった。

○平日のこんな時間に家にいると、奇妙な解放感と、社会から取り残された孤独感が入り交じった、奇妙な気分が襲われる。

ラノベで多用される「……」「――」ですが、これは一般賞への応募を考えた場合、利点になりません。現状の本作でも利用頻度が多すぎる印象で、再確認をお勧めします。また、「一行空けの代わりに《……》を挿入」も、「意図がよくわからない」と判断されるリスクをはらみます。

よほど特殊な読ませ方をさせるのでない限り、名前の初出時のルビは不要です。煩わしいと感じる人もいます。

● 人称面について

・「セリフの味」「地の文の声」とともに実現された真性三人称小説です。

・「客観的に書こう」という意図が窺える記述もありますが、「自由間接話法（＝地の文における独白）の多用」＋「地の文の主観、すなわち記述者の視点が作中当事者となっている記述も目立つ」＋「地の文において『声』を持つに至らない説明のための説明が多く行われている」という理由で、「疑似から真性への過渡期にある混合人称」と考えられます。

地の文が作中当事者の主観で書かれており、また、それが作者の意図だと考えられることから、疑似三人称作品と判断できます。

・他者への目配りができた、きちんとした一人称です。

・「他者への感心・洞察の不足（＝事実上の欠落）」が特徴的で、初心者と女性応募者に目立つ「自分語り一人称」と言えそうです。

・「描写の不足（＝事実上の欠落）」＋「地の文のほぼすべてが『説明のための説明』である」という理由で、「初心者によく見られるあらずじ文体」・「三人称」と感じられます。

典型的な疑似三人称作品で、「疑似三人称のルールから外れる記述」は見られませんでした。

ただ、本作の場合はすべての場面に主人公・理沙が登場していますので、「一人称の方がつきりする」、「記述を主人公の知覚の範囲内にした方が恐怖感の醸成に効果的」とも感じました。

●構成面について

・吟味されたストーリー展開と感じられます。

読者に違和感を与えてしまうと思える要素が散見します。

記述レベルが相当に高いため、読むこと自体に晦渋が伴うことはありません。しかし、「なにを・どのように書くか」「事件のどの部分を切り取って読者に提示するのか」といった部分の理解度、実践度に関しては、多くの応募者と同レベルにあると感じました。

以下、箇条書きですが、気づいた点をお知らせします。

・セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがって——すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが——小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であった方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し（「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること）あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること）が必要と感じます。

生きた、有効なセリフとは――？ これはもう、「お手本となる作品」を読み込むことで身につけるしかないのかもしれませんが、作者ご自身の「自分はこういう言葉を（他者に）かけてあげたい」「自分はこういう言葉を（他者から）もらいたい」という「想い」が基本になると思います。

本作で多用されている『（ ）』でくくった独白体。これは本来、地の文での内面記述がしにくい真性三人称で意味を持つもので、内面記述に制約のない疑似三人称で用いるのには違和感があります。また、その使われ方の多くが「地の文の連続を避けるためのワンポイント」であるため、区分としては「独り言」となり、「応募作で書いてはいけないこと」に相当します。悲鳴や擬音とともに幼稚さ・安直さを醸してしまうこの独り言を避ける方策は実に単純、要は「主人公ひとりしか登場しない場面は書かない」です。地の文での解説や独り言ではなく、「主人公と他者の生きたやりとり」を通じて、読者に知らせる必要がある事実を提示してください。

・主人公のキャラ設定を見直してください

疑似三人称である本作は実質一人称ですので、私が紹介している一人称のルールが適用されると考えられ、つまるところ「人格的に劣った大人を主人公にしてはいけない」に抵触しているように感じます。

「小説の主人公は際立った才能を持つ優秀な人間しか勤まらない」

とは言い切れませんが、しかし、「どこにでもいる、つまらない女」を主人公にした実質一人称が、——記述レベルはAクラスであるにしろ——「どこにでもある（＝誰にでも書ける）つまらないもの」にしかなり得ないのもまた事実です。（作劇上つまらない人間を主人公にしなければならぬ場合は、真性三人称のスタイルで「書き手自身の『つまらなくない人間の声』を与える必要があります」。

キャラに魅力を与える方法は「魅力的なセリフ」、そして「魅力的な行動（＝誰でもできるわけでない、意地・価値観・想いを体現するための行動）」で、それらが可能となる形の作品構成を執筆前に吟味することこそが本来必須なのです。その観点で、現状からの改変度を最小にしながら理沙に魅力を与える方法を勘案すると、「鋭敏な洞察力ゆえに息子の犯行と察知し、『自分の腕を切り落としていい、殺していいから、これまで犯した犯罪の責任を負いなさい』と詰め寄る母の思い」を打ち出すことではないかと思えます。

・「読者がどこまで察知するか」と「現実世界との整合性」を再確認してください。

「母子二人しかない家で腕が発見された」＋「息子の部屋に猟奇的な本があった」が提示された時点で、読者は「聖也の犯行」と察知します。したがって、その翌日の理沙の言動は、読者にとって「とつくにわかっていることを何ぐだ言ってた」でしかなく、有害と言えます。つまり、「書いてはいけない」のです。

また、「校門に置かれた生首事件」ほどではないにしろ、「民家から片腕が見つかった」は大事件で、警察が早期に立ち去ることはあり得ません。（母子二人は警察によって徹底的に監視され、大拳して押し寄せたマスコミに蹂躪されます）。加えて複数連続殺人犯の特徴は「支配者と奴隷」ですので、「聖也が支配者、勇人が奴隷」という描き分けは最低限しておくべきです。（ただし、読者から見た魅力的な猟奇殺人犯は、「体に障害を持ちながらもすべての犯行を単独でやっのける優秀な犯人」なのだと思います）。

これら「当然踏まえていくべきこと」がぼつかり欠落してしまうと、やはり「現実との整合性吟味が不充分」と言わざるを得なくなるようです。

聖也の容姿・雰囲気につわる記述は有効で《く伶俐という》《く不具者ならではの艶やかさ》などは作家性を窺わせる表現と感じます。（ただ、「不具」は明らかな要注意語句ですので、使用にはリスクが伴います）

「動物が事故に遭う」にナーバスな読者もいるため、本作冒頭の記述はいかんせん避けるべき——その時点で「こんなもの読みたくない」と拒絶される危険をはらむ——と感じます。読者にとって作品は「どこの誰が書いたかわからない、それを読むことでどんな精神的ダメージを強いられるかわからない危険物」でもありますし、読者に対する十分な配慮が必要だと思っています。

「ホラーとは何か」は案外と難題で、「記述を通してぞわつとする恐怖を味わわせる」のもありなのでしょうが、現状の本作の骨格が「幼少期に片腕を失った少年が成長してから連続殺人犯になった」という猟奇性ですので、それを中心にした記述で作品を構成するのが基本となってくるように思えます。

ある事態に直面した主人公が、その価値観を根拠にある判断をし、それ（価値観）を体現すべく行動するさまを描くのが本来の小説です。まず打ち出すべきは主人公の魅力。そして全体を通して描くべきなのは、「読者の心にある『想い』として残る価値観・情感」なのだと思います。

これが言われたことのほぼすべてです。そんなに「ツマラナイ、ツマラナイ」と連呼しなくても……

しかし、悪いところに気づかないまま、いくら書き続けたってムダですからね。

これを踏まえて改稿したのが、拙作『初恋』（原稿枚数98枚）です。

<http://ncode.syosetu.com/n50890/>

残念ながら力及ばず、落選しましたが。

私の実力はこの程度ですが、よろしければ引き続き本作をご覧ください。

第八回 巧い文章とは？

第八回、『悪文排斥！』。このエッセイの最大のテーマでもある、巧い文章とは何か。今回はこれを交え、描写について考えてみたいと思います。

さて、「文章力のある人」や、「巧い文章」とは、いったいどんなものを指すのでしょうか。皆様はどんな文章を読んで、「巧い」と感じるのでしょうか？

『なろう』では文章評価という項目があり、五段階で点数が入られるのですが、その評価は人によって様々です。同じ作品を読んでも、ある人は「巧い」と感じて5点を入れても、別の人は「そうでもない」と、低い点数を入れる。

私の文章に関しても、思うところは様々のです。みんながみんな最高の評価であればありがたいのですが、残念ながらそういう方ばかりではありません。「1」や、「2」を付ける人だっています。もちろん、自分の文章が万人に受け入れられるなどと自惚れているわけではないし、読む人によって評価が分かれるのはむしろ当然のことです。

思えば私が評価するときだって、明確な基準があるわけでもなく、ものすごく感情的に点数をつけていると思います。

誤字脱字が目につくのが、視点なんて無いに等しいぐらい乱れていようが、はっとさせられるような言い回しがあったり、気の利いたセリフがあったりすると、それだけで「5」を入れたり、反対に「巧いのだろうけど、妙に鼻につく」と感じると低い点を入れたり。客観的な評価というよりは、ずいぶんと自分の好みが反映されます。我ながら、理不尽な点数の付け方をしていると思っていますのですが。

しかし、自分の中では巧い文章の定義というのは決まっ
ていて、『究極に巧い文章とは、文章の存在を感じさせない文章である』
と考えています。

読んだ人に文章が巧いと思われるなんてまだまだ。読んでい
るとにさえ気づかない、空気のような文章。

「なんだ、小説なんて簡単に書けるじゃないか」と思わせてお
いて、やってみるとできない。これが私の目指すところです。

例えば音楽においても、アマチュアバンドは、曲の中でひたす
ら超絶なテクニクを入れてきます。「どうだ、凄いだろ。参った
か」と言わんばかりに、ギターもドラムも自分が目立つことしか考
えていません。

それはそれで凄いものだけれども、しかし本当の意味の巧さとはか
け離れている気がします。事実、プロの音楽というのは、やってい
ること自体は非常にシンプルです。できるだけ余計なものを排除し、
リハーサルの中で音の調和をとってゆくことで洗練された音楽を作
り上げる。無限のパターンの中から作る音のバランス——それは、
プロの耳でしか成し得ない、究極の「巧さ」なんです。

何も知らない人にとっては、一見、アマチュアバンドの方が凄
いことをやっているようですが、プロはもっと別の次元で音を聞
いている。本当の巧さはそれじゃないと知っているんですね。

文章においても、それと同じ事が言えるのではないでしょう
か。陳腐な形容は避けるべきですし、センスのある比喻や形容を連発
すれば、「巧い文章」になるわけではありません。

- ・ 形容は控えめに、
- ・ 意識的に段落を取って読みやすく、
- ・ なるべく平坦な描写を心がける。

形容って、ファッションに例えるとアクセサリだと思います。どんな高級なものだって、ありったけ身につけていたらただのチンドン屋ですよ。使うなら最適なものをセンスよく。それは別に高価なものじゃなかったって——文章で言えば多少つたないものだって——使う場所と見せ方で、充分に効果を発揮するんです。

これは「プロっぽい文章」でお話した、「ヘタの隠し方」のひとつです。いくらダイヤモンドを持っていたても、それを他の宝石の中に置いたら目立たなくなります。でもガラス玉だって、黒地に置いて光を当てれば人目を惹きますよね。

ところが安っぽいガラス玉しか持っていない人に限って、文章の中に色とりどりのガラス玉を敷き詰めたがるようです。「ここ一発」の描写を浮き立たせるためにも、それ以外の文章は平坦に。これが巧い文章、少なくとも巧いと思わせるコツではないでしょうか。

平坦というのを、もう少し具体的に挙げましょう。

- ・ルビを振らなければ読めない漢字や、傍点を不必要に使わない。
- ・体言止めを連発しない。
- ・擬音や、『！』『？』を多用しない。
- ・おさないこどものせりふだからといってぜんぶひらがなにしない。（だって大学教授の台詞に難読文字を入れたからって、賢い雰囲気が出るわけじゃないでしょ）「モチロン外人ノ台詞ダカラッテ、カタカナデ書イタラダノギャグデスヨ」
- ・いくら時代物でも旧仮名使ひはやり過ぎでせう。
- ・陳腐な文章を書かない。
- ・巧く書こうとして妙な表現をしない。

この中で難しいのは体言止めでしょうか。小説を書いていれば絶対に使う場面は出てきますし、効果的に使えばリズム良く、読み

やすい文章になります。具体的に説明はしにくいのですが、いくつも連続して体言止めが続くと落ち着きがない印象になります。

擬音に関しては、一部の小説マニュアルにあるように、絶対禁止とは思いません。ただ、使うならよほど神経質に。使う場所を間違えなければ、センスのない形容詞を連ねるよりずっと効果的です。しかし不用意に擬音を使えば、その一文で小説全体がぶち壊しになります。

陳腐な文章というのは、今まで散々言い尽くされてきて、「またこれか」と思わせてしまうものです。例えば……

『その岩壁は、まるで嘗々と築き上げてきた人類の英知を嘲笑うかのように傲然とそびえ立っていた。』

とか、

『もちろん、。。。であったのは言うまでもない。』

とか、

『桜花爛漫の春の訪れ』

などなど……

こういう類のものは書いても書かなくても一緒。紙とインクのムダ。だったら書かない方がいいです。読んでいて興醒めしてしまえますので。

「妙な表現」というのは、なかなか自分では気づかないものです。二重形容だったり、相容れない言葉で意味不明になっていたたり、違和感が感じられる文章のことです。これも例を挙げると、

・「真夏の暑い盛りに」

真夏が暑いのは当たり前です。

・「私を見据える黒曜石のような双眸は、冷たく青い光を放っていた。」

いや、そりゃあ青い黒曜石だってありますけど、普通は黒曜石と言ったら黒を想像するんじゃないでしょうか。これは別のものに例えるべきだし、どうしても「青い黒曜石」になぞるのであれば、

『私を見据える双眸は、稀に見る青い黒曜石のような冷たい光を放っていた。』

とすべきじゃないでしょうか。

・「凜とした、涼やかな眉を大仰にひそめて見せた。」

『凜とした』と、『涼やか』が同じような形容の重複。そこにあまり良い意味ではない『大仰に』とくることで、統一感のない悪文と言えます。（これが悪文と思わない人は文章音感のない人です）

以上が、私の考える「平坦な文章」です。要はあまり肩肘張らず、カッコつけないように言い換えることもできます。

『それは小説ではありません』、『描写肥大という病気』、そして今回の『巧い文章とは』で、悪い例ばかりを挙げてきました。描写をそぎ落とした「あらずじ」はダメで、無駄を連ねる描写過多もダメ。ついでに陳腐も美文調もダメとなると、「じゃあどうやって書けと言っんだ！」ということになりますね。

私自身が巧い例文を書けないのはもちろん、「小説はこう書かねばならない」と決めつけることは、発想や表現の幅を狭めることになり、自戒としてそういう考えを持たないようにしています。ただ、「こう書くのは望ましくない」ということは確かにあると思っています。

ます。

そういうわけで、私が具体的に「こうやって書くんだ」ということは言えません。強いて言うなら、「安直に言葉を選ばない」ということではないでしょうか。

与太話 その？ 読むことと書くこと

『小説が上達する上で、読むのと書くのとどっちが大事だと思う？』

なんて会話をよく聞きます。この質問に、「読むこと」と答える人は執筆量が足りない人、反対に「書くこと」と答える人は読書量の足りない人ではないでしょうか。

結論、というか私の考えを申しますと、当然ながら「どちらも同じぐらい大事」であって、もし毎日二時間小説を書く時間があるのなら、一時間読書して一時間執筆するのが理想だと思います。現実には難しいですけど。

しかしまあ、「読むのと書くのとどっちが大事だ」なんて疑問を持つこと自体、明らかな読書量不足だとは思いますがね。

だって、小説なんて、読むことに飽き足らなくなったから書くんじゃないのですか？

「小説家は読書家のなれの果て」

とは、プロ作家・清水義範氏の言葉ですが、小説の巧い人、ましてやプロになる人というのは例外なく読書家であります。現在の流行作家、東野圭吾氏は「あまり本を読まなかった」と公言していますが、それは「他のプロ作家と比べて」という意味で、間違いなく千冊単位の本は読んでいますよ。

「本は読んだことないし、たまたま書いて応募したら入選。プロになっちゃった」なんて言葉を本気で信じている人は、「街を歩いていたらスカウトされて芸能人になった」っていう話を鵜呑みにしているアホと同じ。そんなことはあり得ません。まあ、そう公言し

た方がかつこいいですからね。いかにも才能があるみたいで。

「読むことと書くことは違う」というのは確かに事実ですが、「読まなきゃ書けない」というのもまた真理です。

ただ、「どれだけ読めばいいんだ」と聞かれても、それこそ数量の問題ではありませんし……少なくとも「活字中毒を自認するぐらいいには」だと思います。というか、それほどまでに小説が好きでない人がどうして小説を書こうと思うのか、私には理解できませんが、別に自己表現の手段は小説だけじゃないですからね。

「音楽は聴かないけれど、作曲が好き」と言っているのと同じです。

確かに「とにかくたくさん書くのが上達の近道」ではあると思うのですが、ただしそれには条件があつて、「自分がちゃんと小説の審美眼を持った上で」のことだと思います。何も知らずに、もしくは何も考えずにたくさん書いたって、ヘタのまま固まってしまふのではないでしょうか。それを避けるには、たくさんの本を読むしかないと思います。

でも、何事も例外があつて、「なろう」においてもすごく良い小説を書いているのに、自己紹介欄に「あまり小説は読みません」なんて書いてある方もいます。思わず「本当かよ！」と驚くのですが、事実、そういう文才のある人はいらつしやるようです。

もちろん、「例外」ですけどね。とりあえず自分がそういう天才だとは自惚れない方がいいし、小説を書く上で読書が役に立つか立たないかは、たくさんの本を読んだ後に判断しても全然遅くないと思います。

私はたくさん読んでいてもこの程度ですが、それでもやはり、書くことよりもまず読むことが大切と考えております。

第九回 『KAG・ROU』は読みやすい？

『読みやすい文章は巧い文章なのか』

話題作、『KAG・ROU』の文章を例に取り、これについて語りたいと思います。

小説が人に読んでもらうものである以上、文章が「読みやすい」ということはとても大切な要素です。このエッセイでも申し上げてきた、人称と視点、基本的な記述の仕方や段落を意識的に取るということも、すべては読者に読みやすく、わかりやすいと思ってもらうための配慮です。

ただ、読む人によって「読みやすい」の基準は違いますし、中には「読みやすい」の意味を履き違えている人もいるようです。

よく言われることですが、物語を伝える手段として、小説は漫画や演劇、映画よりもとっつきにくく、敷居の高いメディアです。

その理由は、小説は単に文章を読み流しただけでは理解できない——読んでから文章を映像なり、画像なりのイメージに置き換えるという、読解力を必要とするからです。映画や芝居の鑑賞のように、一方的な受け身では何も入ってきません。読むことが苦手という人は、結局のところ読解力の無さが原因なのです。

と言ってしまうては身も蓋もないのですが、とにかく普段から活字に馴れていない人にとって、「読んで理解する」、「読解する」ということは、ことのほか面倒な作業のようです。

以前、私は「小説の描写は核心をついてはいけない。堀を埋めるように周りを囲み、言いたいこと（＝核心）を浮かび上がらせるのだ」と申しました。

しかし、活字が苦手、読解力のない人にとっては、そういう書き

方をしたものは難解に感じるのでしょうか。（もつとも、難解である原因は書き手にあることも多々ありますが）

・彼はいつも清潔な白いシャツを身につけている、銀ぶち眼鏡の似合う男だった。

という文章より、

・彼は神経質な男だった。

と一言で書いた方が、「読みやすい」、「わかりやすい」と言われてしまう。

おそらく、『なるう』においても多くの方が否定的であろうケータイ小説。

あれを「読みやすいから」と好む若者が大勢います。しかしながら、多少でも小説というものをたしなんだ人ならば、「読みやすいの意味が違うよ」と、嘲笑を交えて一蹴するでしょう。文章に何の技術もこだわりも感じられない、情景も心理も作者の身勝手な「説明」に終始する、ほとんど中二ポエムでしかない文字の羅列。

あんな書き方をしたら、読者は何も考える必要がありません。そもそも文章の中に読解しなければならぬ情報はほとんど含まれていませんから——あまりに稚拙な言い回しに思わず意味を考えてしまうことはありますが——「読みやすい」となるのでしょうか。

（ケータイ小説は小説とは違う「別物」とすれば、あれはあれで楽しめますが）

ケータイ小説は極端な例ですが、一般的な小説においても読解力を必要としないがために「読みやすい」と言われるものはあるようです。

やり玉に挙げて申し訳ないのですが、少し前に話題作となった『KAGEROU』。ご覧になった方も多いと思います。少し前に、

私も読んでみました。某レビューでは散々にこき下ろされていて、いったいどれほど酷い小説なのか、やっかみも多分に入っているのではないかと思っていたのですが……

なるべく先入観を持たず読んだつもりですが、その内容はともかく、やっぱり残念な文章でした。この小説の褒め言葉として、「読みやすい文章」というのがよく挙げられていましたが、これは「読みやすい」ではなくて、先ほど申した「中身のない」文章だと思うんですよね。

小説の文章というのはただ状況を描写すればいいのではなく、文章そのものが小説世界を内包する小宇宙でなければならぬというのが、僭越ながら私の持論です。

文体は書く小説によつて使い分けるべきですし、学園ものと同じ文体でSFは書けません。

例えば『昨日の夜に出会った女はとても美しかった。』ということを書くのにも、その描写の仕方はジャンルごとに異なるはずですよ。わかりやすい一人称で、ちよつと実践してみましよう。

・SF

私とその美しい存在に遭遇したのは、たしか昨夜のことだった。わずか数時間前のことなのに、今となつては夢か現実か定かではない。それは彼女の美しさがおよそ人の想像を超越するもので、そのせいか、私は次元を越えた世界に迷い込んだような錯覚に陥ったからだ。

・中世ファンタジー

私がサーラの化身とも呼ばれる彼女に出会ったのは、昨夜のこと

だった。サーラとは、美を司る月の女神のことである。それは彼女が物腰と微笑の優にやさしく、類い稀なる美貌の持ち主でもあったからだ。噂どおりのその美しさに、私は言葉を失った。

・学園もの

ぼくがさいしょに彼女と出会ったのは、昨日の晩のことだ。

出会った瞬間、ぼくは馬鹿みたいに口を開けたまま、その場に固まってしまった。なぜって、こちらにむかって颯爽と歩いてくる彼女はあまりにきれいだったから。

・時代もの

わたくしがあのお方をお見受けしたのは昨夜のこと。月に照らされるその顔は、夜目でもわかるほどうつくしいものでした。

・ハードボイルド

俺があの子を見たのは昨夜のことだ。

美しい女だ。

朴念仁と揶揄される俺でもそう思った。

・エッセイ調

昨夜、確かにひとりの女性と出会ったはずなのに、今となってはあれは夢ではないのだろうかという気がする。というのも、私は生まれてこの方、あんな美しい女性にお目にかかったことがないからだ。

……と、まあ巧いかへたかは別にして、なんとなく違いはわかるのではないでしょうか。

この例で言えば、時代ものの文章では

・話者は女。

・おとなしい、内気な女性。

・教養のある喋り方をすることから百姓女ではない。おそらく武家か、商家の内儀。

・「お見受け」と言っていることから、相手は自分より身分が上。という情報が含まれています。

小説世界とキャラクターが決まれば文体はおのずと決まるし、小説世界と乖離した文体で小説を書くことはできません。（面白いかもしれないけど）

特に一人称小説においては、不用意な文末ひとつで小説そのものをぶち壊してしまうこともあります。言葉遣いはもちろん、改行のタイミングや、何を漢字で何をひらがなにするか、それによって文体のニュアンスを作り上げていきます。

『夜目でもわかるほどうつくしいものでした。』が、『夜目でも判るほど美しい物でした。』となつては、雰囲気がるで違ってしまいます。

ハードボイルドの例文だって、

オレがあのおんなを見たのは昨夜のことだ。
うつくしいオンナだ。

と書いては、同じ文であっても文章のトーンの違いから軽薄ポルノみたいになってしまいますよね。

あまりに流暢な文章に、あえて違和感を伴う言葉や漢字を入れて目を止めさせるといふ高等テクニクもありますが、それこそ「この人は悪文でさえ巧く使いこなせるのだ」ということが見抜けるほ

どの読解力を持つ読者でないと、単に「ヘタクソ」と言われてしまいます。

「何を、どれだけ描写するか」というのも以前に少しお話ししましたが、本来はそれだって書くものによって変えてゆくべきです。

学園ものなんかでは人や風景はあまりくどくど書かず（というか、できる限り排除して）「くつきりした顔立ちが印象的な背の高い女性」と、一言で済ませてしまうような投げやりな書き方に、心理描写は感傷的な言葉で綴ると雰囲気醸成に効果的です。

反対に中世を舞台のファンタジーなんかでは、人物や風景はくどいぐらいに書き込み、人の生死や運命をあつさり書くことで原始心性を浮かび上がらせます。こうすることで小説から近代臭さが抜けます。

で、翻って『KAGEROU』です。読んでみて、「文体で小説世界を構築する」なんて芸当はまったくできていません。妙なところがカタカナになっていて鼻につくし、書かれていること以上の情報は何もない、中身がない文章だから、普段あまり本を読まない人にとっては「読みやすい」となるのでしょうね。でも、それは決して褒め言葉ではないと思います。

ただ、文章はともかく、物語自体は面白いと思います。伏線の張り方や、破綻のないストーリー運びはさすがプロだと感嘆します。「よくある話」という意見もあるようですが、小説のテーマが人々の憎愛に集約される以上、「よくある話」がもつとも面白い話でもあるのです。しかし、本来それにはオリジナリティ溢れる小説よりも、ずっと高いレベルの文章力を求められるのですが。

小説にしろ何にしろ、エンターテイメントにおいては「面白いこ

と」が第一条件ではありますが、「面白い小説」「良い小説」ではありません。

単純に面白い話を作りたいのなら、何も小説である必要はありません。漫画だって映画だって、それこそシナリオライターだって、面白い物語、感動する話はいくらでも作れます。

どうして小説なのか。自分を、物語を表現する手段としてどうして小説を選んだのか。小説が文芸、文章の芸術である以上、文章に対するこだわりや技巧のない小説は、いくら面白くとも「良い小説」とは言えないのではないでしょうか。

第十回 キャラクターのDQNネーム

「悪文排斥！」第十回。早くも書くネタがなくなってきたので、今回はキャラクターの名前について語ってみます。

「キャラクターの名前なんてテキトーだよ」とか、「名前なんて何でもいいんだよ」と言う人もいるかもしれません。

もちろん、ほとんどの作者はこだわりを持ってキャラクターの名前をつけていると思いますが、残念ながらごく稀に主人公の名前を知った瞬間に萎えてしまふ、読む気が失せてしまふような作品もあります。

「名は体を表す」という言葉もありますが、すべてを文章で表現する小説において、キャラクターの名前は「顔」であり、特にプロほどのくつきりした性格心理によるキャラの書き分けができないアマチュアにとっては、「誰が誰なのか」を見分ける上でとても重要なファクターです。

極端なことを言えば、『沙也香』という女の名前で男のキャラだとしたら、違和感があるどころか感情移入なんてとてもできません。そうでなくても、『雄介』や、『強志』なんてイカツイ名前で、『病弱で蒼白い顔をした』とか、『伶俐という言葉がぴったりの』という描写をいくら重ねても、説得力はないでしょう。

反対に、さわやかで明るく、友達も多い男が『颯太』だったりしたら、（なんて安直な名前だ……）それほど多くの描写を必要としなくとも、なんとなくイメージは湧きやすいのではないのでしょうか。

現代が舞台なのに決してあり得ない名前というのも、はなっから

「この世界は嘘だ」と言いふらしているようなものです。

『すめらぎしおん
皇城紫音』

『みなつきみこと
海那月命』

いったいどの暴走族ですか？

しかもこんな名前のキャラが「どこにでもいる普通の高校生」だ
ったりした日には！

……まあ、リアリティを持たせる筆力に自信があるなら結構です
が。

ファンタジー小説においても、主人公や主要キャラはすごくかつ
こいい名前がついているのに、王様がしょぼいネーミングだったり
すると一気に興醒めです。

あり得ないでしょうけど、『サム』なんて庶民的な名前を王様に
つけてはいけません。（例え本当に『サム』という王様が実在した
としても！）どんな重々しい台詞も、すべて上滑りしてしまいます
（コメディならいいかもしれない）

以上は極端な例ですが、案外やりがちな失敗を挙げてみましょう。

・ひとつの作品の中で名前の語感が被るキャラが存在する
『せいぜ聖也』と、『せいじ誠司』、もしくは『こうせい康生』など。

・同じく漢字が被る
『せいぜ征哉』と、『まさし征志』など。

・語感が悪い

『レカ』、『藤木芳樹^{ふじきよしき}』など。

・小説に限らず、漫画や映画に登場したキャラクターの名前に似ている。もしくはまったく同じ名前のキャラがすでにいる。

意図的でなくとも偶然の一致はあると思います。しかし、みんなが知っているようなキャラを連想させてしまうような名前は、いくらオリジナルを謳ってもそれまでのイメージが強すぎて、なかなか「別人」として認識してもらえません。

もちろんこれを逆手に取ることもあって、例えば実在する人物をモデルした場合などは、その名前も似せておくと書き手も読み手もイメージしやすくなります。

これは例えば、東野圭吾氏の『ガリレオ』における主人公、『湯川学』も、物理学者『湯川秀樹』をもじっているのでしょう。

ちなみに私のペンネーム『円城寺まどか』は、少女漫画『ガラスの仮面』に出てくる登場人物と同じだそうです。これは偶然であり、何の関係もありません。

アマチュア作家が完全に人物の書き分けができるのは四人が限界、と言われる。読者が混乱しないためにも、主人公を含めて主要な登場人物はちゃんと見分けのつく、特徴的な顔（名前）を与えるべきです。

もちろん、「あり得ない名前」「特徴のある名前」ではありません。よく言われることですが、推理小説における名探偵の多くは、「特徴的な姓＋平凡な名前」です。

『明智 小五郎』

『金田一 耕助』

『伊集院 大介』

『江神 二郎』

『巫 弓彦』

決してこんな名前の人はいないのだろうけど、リアリティはある。過不足のない、絶妙のネーミングですね。

話は少々脱線しますが、今年の『日本ホラー小説大賞』受賞作、『お初の繭』^{まゆ}に出てくる脇キャラの名前が最高でした。

物語は明治の製糸工場を舞台にしたホラー小説なのですが、繭を買い付けに来たロシア人バイヤーの名前が、なんと『フルチンスキー』。(笑)

「フ、フルチンスキーさん……！」

文章のセンス、文章音感の有無というのは、こんなところにも出てしまうようです。

第十一回 痛々しい台詞

第十一回『悪文排斥!』。今回は台詞について。

台詞と言えば私、円城寺まどかの苦手とするところで、第七話の『円城寺まどかがナンボのもんじゃい!』でも散々に突っ込まれていました。自らの傷をえぐるようですが、もう一度蒸し返してみます。

・セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがって――すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが――小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であつた方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し(「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること)あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること)が必要と感じます。

……と、いうことだそうです。

そんな私がおこがましくも台詞について講釈を垂れようというんですから、説得力なんぞあるはずありません。言えることも基本以下の低レベルなことにとどまるでしょう。

「痛々しい台詞」。充分に自戒を込めています。

痛い台詞 その一

「「ええ〜！」」

と、カギ括弧を重ねる台詞。

『異口同音』という言葉を知らないのでしょうか？ どうしようもなく稚拙に感じます。どだいこんな日本語表記は「無い」のですよ。

しかし『なろう』の作品において、確かに「カギ括弧を重ねることでは表現できない台詞」というのをお見受けしたことがあります。（厳密にはカギ括弧ではありませんが）。それは設定や諸々の条件が重なったことですが、一概に禁止とは言えないのかなとも思いました。まあ、極めて例外的なことですが。

痛い台詞 その二

「ワハハハハハハ！」

「うわあああ！」

と、台詞で笑いや悲鳴を表現する。

いや、これも絶対ダメとはい切り切れないかな。笑いはともかく、悲鳴は私もやってしまっているし。でも読む人によっては

「無神経な日本語」

「デリカシーの欠如」

に、感じられるようです。とりあえずやらない方がいいみたいですね。（なんか弱気だ……）

痛い台詞 その三

「いやあ、今日もいい天気だ」

ぼくは窓を開け、伸びをして呟いた。

「あれ、なんだこれは」

窓辺に見たこともない虫がとまっている。ぼくは不思議に思って顔を近づけた。

「何だろう。見たこともない虫だ」

見る角度によって羽の色が変わる。赤いと思うと次の瞬間には緑色に。そしてすうつと色が薄くなる。

「辞典に載ってないかな。調べてみよう」

ぼくは書棚に手を伸ばした。

台詞がイタいというよりはキャラがイタい。こんだけ独り言の多い奴っていったい……。

そういえば、「三人称・神の視点は地の文で心理描写ができないから」と言って、思ったことを全部台詞で独白している自称、神視点の作品があっただけ。作法としては間違っていないけど、小説としては間違っている気がします。

痛い台詞 その四

「あ、あれは確か昨日ぼくが作ったカレーライスじゃないか。朝

出かけるときはちゃんと戸締まりを確認したはずなのに。隣の鈴木さんがどうしてこの公園で食べているんだ？」

台詞の状況はさておき、キャラクターに都合良く説明的な台詞を吐かせてはいけません。

「まさか……どんな巨大なドラゴンも一撃で倒すと言われる伝説の剣がこんなところに！」

誰がそんなこと言ったんだよ。伏線もなしに。

「誰か、その子を捕まえて。私のお婆ちゃんが三年も可愛がっている黒猫が……！」

だから、台詞で説明しちゃダメだって。やるならせめて自然な会話の中で。

痛い台詞 その五

「七瀬美波って言ったっけ、アイツ。ちくしょう、惚れちゃったじゃねえか！」

のたうちまわるほどこっ恥ずかしい台詞を吐かせてはいけません。

「実は俺、君のこと……」

「え？」

「いや、なんでもない」

やめてください。ジンマシンが出そうです。

「見ろよ、夕日が真っ赤に燃えてるぜ」

おまえも燃えてしまえ！

台詞を書くときはまず自分で言ってみましょう。恥ずかしくなければOKです。

痛い台詞 その六

「いいわ。それじゃあ約束は明日でも良くてよ」

今どきさあ、「良くってよ」なんて言う女いるの？ 見たことがあります？

ねえ、あなた。おありになって？ 私、知らなくてよ。

まさか台詞の末尾を「ざます」にしたらマダムの言葉になるとか、「ござる」をつければ武士の言葉になるなんて思っている人はいないでしょうけど。

ついでに言うなら特徴的な話し方をさせればキャラの書き分けにつながるわけでもありません。これらは全て知識と想像力の貧困によるものです。

まとめ

いろいろ言ってきましたが、私もほとんどに該当する「痛い台詞」を書いてきたみたいです。集約すれば、冒頭の指摘になるんじゃないか。

- ・小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」とする。
- ・キャラの人格表現とは無関係の台詞はただの一言も言わせてはならない
- ・当然、独り言はダメ
- ・会話は一定数繰り返し、ひとつのシーンとして成立させること

はい、出直してきます。

第十二回 円城寺まどかの良文万歳！？

『悪文排斥！』第十二回。今回は「円城寺まどかの良文万歳！」^{マシヤ}と題して、私が感銘を受けた文章、描写を紹介します。

まずはプロの作品から。プロなんだから、どこの一文を切り取っても上手いのは当たり前ですが、その中でも「絶品」を選びすぎてみました。

ジャンルも合わせて記載します。それでは行きます。

グイン・サーガ外伝 『十六歳の肖像』 「闇と炎の王子——ナリス十六歳」より（ファンタジー）

ことに印象的なのはその双の眸である。それは十六歳にしてはあまりにも底深く、考え深く、静かだった。どこか、悲しみに似たものをさえはらんでいる。生来の気品と誇りの上を、けだるい、ものに倦んだようなおちつきがおおっているので、よけいかれは大人っぽく、他の十六歳の少年たちとはまるっきり別の生き物のようにさえ人々の目にうつるのである。

ほっそりとやせたからだはいかにも病弱そうな感じを与えた。かれには、じつと見つめていると、ついと溶けて消え去ってしまいそうな、はかなげな、少女めいた感じと、非常に賢い少年に特有のひそやかで確固たる自負、そして年に似あわぬ、何か諦観に似た老成が、奇妙に混ざりあっていた。その三つの相容れぬものが、とけあうことなく混ざりあって、その結果として、甘やかでつかみどころのない、さし入る光によってたえずそのひらめきを変える貴タンパク石にも似た、ちよつと例のないこの少年の個性をかたちづくっていたのである。

白い絹のチュニツクに、黒ビロードのサツシュをぎゅつと結び、美しいつややかな髪をぶつとりと肩で切りそろえた、十六歳の病弱で聡明な少年——かれこそは、中原の大国パロの王子アルド・ナリスであった。白くなめらかなひたいを飾っている銀の、宝石を編みこんだ《王家の環》が、かれほどに似つかわしく、かれほどにその血を誇っているものも他になかったであろう。

・解説

個人が書いたものとしては世界一長い小説、『ゲイン・サーガ』の外伝より抜粋しました。物語において重要な役割を果たすパロの王子、「この世でもっとも美しい」と言われるナリス様の描写です。「筆舌に尽くしがたい美しさ」を、筆舌に尽くしてみたのだとか。
(笑)

当然、これ以外にもナリス様の描写は随所にあるのですが、よく考えると「絶対にこんな奴いない!」と断言できます。なのにこのリアリティ……。文章力」って、あると便利ですね。

アルスラーン戦記? 『風塵乱舞』より(ファンタジー)

ダリユーンは人間の形をした災厄であった。力強く、しなやかな腕が宙で舞踏すると、陽光を弾いた長剣が海賊たちの頸部を両断し、潮風に濃い人血の匂いをまじえるのだ。海賊たちは腕力にすぐれ、身も軽かったが、ダリユーンの剣に対抗できる者はひとりもいなかった。右に左に倒され、血の匂いを濃くするばかりである。

ダリユーンの後方につづくふたり、ギーヴとジャスワントの剣技も、海賊たちを圧倒した。流れるように優美なギーヴの剣さばきは、流血の四行詩を歌い上げ、ジャスワントの剣勢はシンドウラの太陽のように激烈だった。

海賊たちの屍は、甲板に次々と横たわり、彼らは天国の寸前で地獄へと追い落とされた。ギーヴが甲板上を走り出す。せまい階段の上に舵輪があり、それを動かしている海賊を斬ろうとしたのだ。階段下に着くまでに二度、刃鳴りがひびき、階段を駆け上がるうとしたギーヴはさらに上方から刃を突き出された。

落下する剣を受けとめ、飛散する火花をあびながら、そのまま自らの剣を突き上げる。強烈な手ごたえが、ギーヴに勝利を知らせた。頸すじから血を噴きあげて、海賊は階段を転落していく。

この間、フランギースの弓弦が潮風に共鳴し、死の曲をかなでている。

・解説

アルスラーン一行と海賊との戦闘シーン。たったこれだけの文章に四人の個性的な戦いぶりを描き、風景の描写まで織りまぜる。まったくムダがないですね。

他にもダリユーンの獅子奮迅の戦闘シーンを描いた一文で、『その様子を未熟な吟遊詩人であれば、「斬って斬って斬りまくった」としか表現できなかっただろう。』

なんていうのがありましたけど。初めて読んだのは二十年以上も前ですが、今も心に残る一文です。

凡人が真似すれば「形容が多すぎる」、「まわりくどい」と感じる文章も、田中芳樹先生が書くとなぜかそれを感じさせません。やはり天才です。

『しあわせは子猫のかたち』より（ファンタジー・推理）

子猫、死んでしまったね。本当に残念。もしかすると、自分が死んでしまったということに、今は気付いていないかもしれない。わ

たしも最初のうち、自分が殺されたことに気付かず、普通に生活を続けているつもりだったから。

でも、子猫もやがて、自分が死んだことに気付くにちがいない。そしてきみのもとを去ると思う。でも、その時が来てもあまり悲しまないでほしい。

わたしも、子猫も、自分が不幸だとは思っていない。確かに、世の中、絶望したくなるようなことはたくさんある。自分に目や耳がついていなければ、どんなにいいだろうと思ったこともある。

でも、泣きたくなくなるくらい綺麗なものだって、たくさん、この世にはあった。胸がしめつけられるくらい素晴らしいものを、わたしは見てきた。この世界が存在し、少しでもかわりあいになれたことを感謝した。カメラを構え、シャッターを切る瞬間、いつもそう感じていた。わたしは殺されたけど、この世界が好きだよ。どうしようもないくらい、愛している。だからきみに、この世界を嫌いになつてほしくない。

今ここで、きみに言いたい。同封した写真を見て。きみはいい顔している。際限なく広がるこの美しい世界の、きみだってその一部なんだ。わたしが心から好きになったもののひとつじゃないか。

・解説

『失踪HOLIDAY』、および『失はれる物語』に収録されている乙一先生の短編。

人目を避けて生きる大学生の主人公と、何者かに殺され、幽霊になった雪村サキ、そして彼女の飼っていた子猫との共同生活が始まる。

抜粋したのはラストシーンで、雪村サキが主人公に宛てた手紙の一部です。

小説に年齢は関係ないけれど、若くして乙一先生の目に映る世界はすでに芸術家のそれであることに、深く感じ入ったものでした。ストレートな言葉が、胸に突き刺さります。

『ヘヴンリーブルー』より（恋愛）

（赤ちゃん……て？）

——信じられない、とか。

（誰と……誰の、赤ちゃん？）

——認めたくない、とか。

そんなこと以前に、脳みそが麻痺してしまつて、うまく働かなかつた。いろいろな考えの断片は浮かぶのだけれど、そのすべてが、まるでビー玉みたいに頭の中のテーブルをころころと転がっていつて、何ひとつ意味をなさないまま向こうの端からぽとりと落ちる。

くずれおちるように枕もとの椅子に座ると、お姉ちゃんの横顔が近くなった。

（中略）

心はもちろんずたずたに傷ついていたけれど、お姉ちゃんのことは今でも好き……なんだと思う。歩太くんにいたっては、憎いけれど、本気で憎いけれど、それでもやっぱり好きで好きでたまらない。その気持ちはどちらもほんとうなのに——そもそも歩太くんからはとつくの昔にきっぱり振られているというのに、どうして私は、二人のことを許してあげられないんだろう。

自分自身があまりにも見苦しく感じられてたまらなかった。あんなにはプライドがないのか、と思つてみる。

ないのだった。少なくとも歩太くんのことに関する限り、私にはとつくの昔にプライドなんかないのだった。

・解説

恋愛小説のバイブルと謳われた、『天使の卵』のアナザーストーリー。『おいしいコーヒーの入れ方』シリーズでもおなじみ、村山

由佳先生です。透明感のある、コバルトブルーのような文体が大好きです。意外性のストーリーよりも、とにかく「文章で読ませる」。
懂れます。

『楽園に酷似した男』より（恋愛・官能）

金を掛ければ掛けただけ執着するというつまらない言い回しはしかし私の身の回りではいかにも本当らしく口にされていた。

やらせてもくれないキャバクラだのクラブだの女の子に大金を費やして費やして費やしただけきつと大きく元は取れるとほとんど新興宗教のいじらしいいじましい信念で今夜も金だけ払いに行く男達とか。

人が見ても神様が見てもただの無職の低脳の癖に性欲と虚妄だけは人一倍だという自称実業家だ芸術家だ役者だの男に貢いで貢いで貢いだだけ必ずや薔薇色の未来となつて彼ではなく私がその薔薇色の人生を甘受できると思い込んでいるあんたの方がろくでもない奴かもと周りに呆^{あき}られている女達とか。

一回騙されたら懲りればいいのに元ヤンキー姐ちゃんが売り捌いている原価の百倍の値段がついた補整下着だの商品を売っているんじゃないやしません愛を夢を売って分けて差し上げているのですとアダムとイブを騙した蛇の口調で迫ってくるマルチの商人にデモンストレーションされる洗剤だのを屠られる子羊の如き眼差しで買って買ってたただ買わされるだけの主婦達とか。

けれどそんな奴らに囲まれる私だつて決して高処から彼らを笑って笑って笑っているだけで済むはずがないのは誰よりも私がわかっていることなのだからせめて私は私を笑わないでいられるようにしたかったのに。

・解説

はい、とっても読みにくい文章です。これは冒頭ですが、この小説、なんと全編にわたって読点がありません。一冊丸ごと、ずっとこの調子の文体が続きます。セオリーで言えば悪文なのに、なぜかイメージは心地よい音楽のように頭に流れ込んでくる。

作者は岩井志麻子先生で、もちろんこれ以外は普通の文章でお書きになります。超絶技法を持つ、ごく一部のプロだけに許されるお遊び。生まれ持った文才というのは努力じゃどうにもならんのだなあと、打ちひしがれた作品でした。

かなり私の趣味が出てしまいました。もっと紹介したいのですが、とりあえずこの五作品で。どれも個性的な文体、そして、密度の濃い文章ですね。好みの違いはあるかもしれませんが、誰が読んでも「上手い」と感じるのではないのでしょうか。私もこのレベルに、少しでも近づきたいものです。

第十三回 ファンタジーは何でもあり!?

お久しぶりの『悪文排斥!』第十三回でございます。

前回の続きで『良文万歳?』^{マンセー}をやるつもりでしたが、ちよいと予定変更。今回はとても大切な小説の基礎を語りたいと思います。

というのは、先日、「なろう」においてとても興味深いエッセイを拝見しました。作者様の許可を取っていないので作品名は挙げませんが、「なぜ『なろう』では異世界ファンタジー作品が多いのか」ということを語ったエッセイで（あ、ほとんどタイトルそのままかな……）、その内容を要約すれば、「ファンタジー＝何でもあり」と勘違いしている人が多いのではないか、ということでした。（思いつき要約しました。実際には、この作者様独特の言い回しでファンタジーを語った面白いエッセイです）

なるほど……。確かにファンタジーに限らず、ある意味小説は「何でもあり」ですよ。物語のルールなんて存在しません。ただ、そこにはひとつ条件がありまして、

『小説は例えファンタジーであろうと、現実の社会を映し出していることが基本中の基本』

なのです。

いや、別にとんでもない設定がいけないと言っているのではありません。十八歳の女社長が存在しようと、魔王を一撃で倒す勇者がいようと、ある日突然異世界に迷い込もうと、それは一向に構わないのです。

ただし、「ちゃんと納得できる理由があれば」。別の言い方をすれば、「矛盾のない世界設定で、ちゃんと筋が通っていれば」。

『視点』のときにも言いましたが、小説は読者が手に取った瞬間、作者との間に「どんな設定も無条件で受け入れる」という暗黙の了解とも言える契約を交わします。ですから提示された設定世界を「ありえない」と突っぱねることはできません。

ただ、明らかな設定の矛盾や掘り下げの甘さは「何でもある」とは許されない。なぜなら、（これも繰り返しますが）現実の世界も小説世界も、「ちゃんと筋が通っていること」が最も大切なことだからです。

例えば、殺人がいけないというのはこの世の倫理であって、異世界を舞台にすればそれがまかり通る世界であつてもいいのです。

では、果たしてそんな世界で、人々はどんな生活をしているのか。人を殺すことさえ許されるなら、文字通り無法地帯です。人殺しが許されて、ものを盗むことは許されないなんてことはないでしょう。強い者しか生き残れない。そんな世界に女性や子供は生きていないし、つまりは遠からず滅亡を迎える頹廢の世界です。

百歩譲って、その世界では性別の区別なく『強い者は強い』のだとしましょうか。生まれたときから強い奴が生き残る！

……もはや住んでいるのは人間じゃありませんね。（笑）

設定が現実離れするほど、説得力を持たせる文章力は高いレベルが求められます。

それをも無理矢理説得させたとして、いったい誰がそんな世界やキャラクターを自分の身に置き換えて共感するんですか？

よく言われることですが、異世界に飛ばされた主人公が、どうしても言葉が通じるのか。通じるならなぜなのか。高度な文明を持つていて、異人との言語障害がないとか。であれば、他のことはどれだけ発達しているのか。そんな世界に飛ばされた現代人は、どう感じ

るのか。

例えば、黒船を初めて見た日本人がどれほどびっくりしたのか、想像はつきますか？

「正しく想像」するには、当時の時代背景の知識はもちろん、人間への深い理解が必要になります。これは異世界を描くにしたって同じことです。

（うん、これはとても大切な事だと思う。文章が云々、視点が云々よりもっと大切なことだ）

『現代物は書けないからファンタジー』という人もいるのかもしれませんが、現代物が書けない人に異世界ファンタジーは書けません。以前も言いましたが、あり得ない世界にリアリティを持たせるという点で、ファンタジーは現代物とは比べものにならないほどの筆力を必要とするのです。

・なぜファンタジーに現実社会が関係あるのか

それを語るには、まず「小説とはなんぞや」ということです。かなりの難題でいろんな答えがあると思いますが、私はその答えのひとつに「小説とは人を描くことである」というものがあると考えます。

それには、自分のキャラを生きた人間として扱うこと。（これは多くの方が賛同していただけるのではないでしょう）

そうすればおのずから、その人にどんな感情があつてこの台詞を口にするのか——ということ、この人はどんな性格で、どういう境遇で——するとその人格が形成するに至ったどんな『社会』が背景にあるのか、が問題になってきます。

つまり、ちゃんと生きた人間キャラクターを描こうと思ったら、矛盾のない世

界を作り上げ、その社会で育ったことを人間に反映させることが必要となるのです。

そして、小説というのは書き手による現実社会と人間への理解度が、まともに小説世界を形成してしまいます。

一般的に『ライトノベル』を大人が読まない理由は、「現実の社会を映し出しているとは言えない」からです。もちろん、すべてがそうだとは言いませんし、一般小説であつてもそれができていないものは小説として失格ですが。

しかし、例えば「すぐに異世界に適應できるなんて、どんな神経で、こういう育ち方をしたのか」という根本的なことさえ解決していないものを、多少なりとも社会というものを知っている大人は、小説として面白いとは思わないんです。

架空の世界だから——いや、架空の世界だからこそ、虚空であつてはならない。そこはちゃんと感情を持った「人」が住む世界であり、「社会」を形成していなければなりません。

よく、「小説を書くには人生経験が必要である」なんて言われます。人生経験とは、すなわち社会常識の把握と人間への洞察力のことです。もちろん、ただ歳を食えばいいというわけではありません。無駄に年を重ねた大人だっているし、若くても人や世界に対する洞察力を持った人はいますからね。

私が好きな『なろう』の作品に、おこき先生の『ミリオン』というSFファンタジーがあります。技術的なことを言えば、正直申し上げて、これより上手い作品は多々あると思います。しかしながら、これが文章云々なんて言わせないほど面白い。理由はやはり、おこき先生の世界と人間への深い理解度、そしてそれを根本とした確かな想像力があるからなんです。だから私のような中年読者も虜になる。

「現代が舞台の小説は書けないから」、「ファンタジーなら何でもあり。いざとなれば『魔法』の一言で片付くから」という逃げの理由でファンタジーを書いているなら、そんな小説はろくなものではありません。自らの無知と稚拙さを糊塗するために、異世界ファンタジーを選んではいけない。

……とは言っても、私自身も中高生の頃はファンタジーばかり書いていました。それはやっぱり「現代物なんて書けないから」だったし、自分の書いている世界と現実社会がどう違うのかさえわかりませんでした。ファンタジーが理解できないという大人たちを「想像力の貧困」と決めつけていました。今から思えば、自分が何も知らないことさえ知らなかったのです。

社会常識を身につけ、ちゃんと人と付き合い、世界と人間のやることに共感しようと努めること。

ファンタジーに限らず、良い小説を書くためにもっとも大切なことだと思っています。

第十四回 小説のオリジナリティとは

『悪文排斥』第十四回です。今回も文章ではなく、良い小説とは何か。ことに、小説のオリジナリティについて考えてみたいと思います。

・オリジナリティの意味

物語のパターンは、無限にあるといえば無限にあるし、限られているといえば限られています。

「物語は二つのパターンしかない。すなわち穴に落ちる話と、そこから這い上がる話」

とか、

「ストーリーはとつくに尽きた」

なんて言われるとおり、正直、今さら完全なオリジナルの小説なんて書けるはずありません。

書けたとしても、一生のうちでせいぜいひとつか二つでしょう。

また、そう幾つもオリジナルの物語が書けるのだとしたら、とつくにプロになっているはずです。

そんな独創的な話は誰も望んでいないし、訳のわからん独自の世界を造るより、誰かの世界観（設定という意味ではなく、例えば「○○の世界」と言われるような、物語の雰囲気）を踏襲する方が、ずっと有効的で理解が得られやすいはずです。

『なるつ』においては「似たような話」は、そこらじゅうに溢れかえり、別の人が書いた違う小説なのに「どこかで読んだ気がする」ものが多いようです。

ファンタジーでは異世界もの、ホラーではゾンビものですか。別段、それが悪いわけではないのですが。

ところが、同じような話でも、片やたくさんの支持が得られ、一方はアクセスが伸びないという現象が起きます。もちろん、文章力や構成力といった技術の差もあるでしょう。

しかし、肝心なのは技術ではありません。

私は以前、「もっとも面白い話や感動する話は、この世で一番ありふれた話だ」ということを申しました。

言い換えれば、「人間の感情で重大なものはすべて、一番ありきたりで普遍的なものだ」ということです。

例えば、恋。——誰かを好きで、嫌いで。好きな人に、自分のことを好きになってももらえない。好きな人に嫌われた、去っていった、死んでしまった。親子の情や嫉妬。または欲望、金銭欲、情欲、独占欲など。

小説というのは基本的にはこうした人間のもっともありきたりな感情を描くもので、決してそう多くのバリエーションがあるわけではありません。

思いついたとした凄く独創的な話——例えば、ある日突然、巨大な昆虫になってしまったなんていうのは、文学かもしれないけれど、いったい誰がそんなものを我が身に置き換えて感情移入するのでしょうか？

これは文章に関してもそうですが、個性を標榜するあまり、とんでもない形容詞を編み出そうとしたり、理解不能の世界を造るなんていうのはアホのやることです。

ともかく、小説の描く感情が普遍的なものである以上、それをもたらしシチュエーションというのは、やはりいくつかの人間関係に収斂しゅうれんされるということです。

そうしてまず、あまりにパターン化されつくして、今さら自分のテクニクではどうにもならないような話ひとつと諦めましよう。

好きな人が不治の病にかかって、残された日々を一生懸命生き、愛し合う——とか。

まあ、『セカチユウ』や『美丘』以上のものが書ける自信があるなら別ですが、まず無理でしょう。

長編なら、多少ありきたりでも展開を売りにすることもできますが、中、短編ではたったひとつの売りが命です。このキャラ、この台詞、このシーン。それがすでに誰かがやっていたのだとしたら、その話はおしまい。書いても意味はありません。

・ではどんなものが「オリジナリティのある小説」なのか

一番大切なのは、「自分はこの小説の、何を一番書きたいのか」を考えることだと思います。いや、『テーマ』なんていうご大層なものではありません。

自分が惚れたこのキャラクター、この決め台詞、感動するに違いないこのワンシーン。何でもいい、何かひとつでいいから、「自分の書きたいもの」があること。そして、それをどう書いたら読者に一番伝わるかを考えること。

ただ何か書きたいだけ。

書きたいものはないけど、小説が書きたい。

みんな、どんな小説が読みたいですか？

こんな動機で書かれた小説は、ただのゴミです。書くのも読むのも時間の無駄。自己満足で書くならいいけど、『なるう』に（もち

ろん公募にも）投稿してはいけません。

なぜなら、小説とは人に何かを伝えるものだから。小説は、読者のために書くものではありません。小説を通し、自分をわかってほしくて書くものです。自分の中に伝えたいイメージがないのなら、小説を書く必要はありません。

ダメな小説とは、ヘタな小説でもなければ平凡な小説でもありません。書き手の感動がないままに書かれた、「伝えたい」という気持ちのないものや、誰にも理解できない独りよがりの小説です。

あんな話がウケるだろう。いや、こっちの方が面白そうかな。

こうした安直なストーリー選びはそのまま中身の薄さに直結し、「またこの話か」と思われるのがオチです。これがオリジナリティの欠如です。

作者自身が自分の作品に惚れ込んでいないままに、読者の共感を得られません。

物語を思いついたら、書く前に「自分の書きたいものは何なのか」を明確にする。そして、それを読者に一番伝わるように書く。

それが、「物語のオリジナリティ」ではないでしょうか。

第十五回 小説と作者

お久しぶりです。円城寺まどかです。『悪文排斥』も第十五回を数えました。

ネタはとづくに尽きているのに、「書きたいことが出てきたら書く」つもりで、完結させないまま放置プレイしています。おかげで約三ヶ月ぶりの更新となっていました。

今回はまたも小説の精神論を語ります。「はじめに」で申し上げたとおり、実力のない人ほど精神論が大好きなんです。ええ、私のことですよ。

このエッセイも、もはや酔っぱらいオヤジの戯言たわごとと化してきましたが……とりあえず自分のことは棚に上げ、今回も立派なことを語ってみせましょう。

すみません、前置きが長くなりました。それでは行きます。

『小説には自分が表れる』

いえ、小説に限らず、絵画や音楽など、芸術と言われるものには自分の心が映し出されます。小説とは自己表現なのだから、自分を出して当然。小説を書く人は、誰だって自分の考えた物語に共感してほしくて書いているはずです。

「でも、本当の自分をさらけ出すのは恥ずかしい」

「こんなことを書いて、嫌われたらどうしよう」

そんな心配をして、自分を出せずにいると感じている人もいるのではないのでしょうか。

もしくは、「小説の中でだったら違う自分を出せる」と思ってい

る人もいるかもしれませんが。

でも大丈夫です。「自分を晒せ」と言っているわけではありません。小説には「自分が出てしまおう」と言っているのです。

作品と作者は別物とする人もいますが、私はそうは思いません。むしろ小説こそは何よりも雄弁に本人を語ります。普段、どんなに良いことを言っている人でも、根が嫌な奴は嫌な小説を書くし、ケチな奴はしみったれた小説を書きます。

いくらそれを隠そうとしたところで、偽っていることそのものが本人を表してしまっているんです。

そもそも本来の自分がそうなのだから、自分を出していることにも気づいていません。小説に表れる人柄こそが、その人本来の人間性なのです。（だからって作者の人格否定までしていって意味じゃないですよ。念のため）

小説とはただ紙に（パソコンに？）向かって書けばいいというものではなく、壮大な小説を書こうと思ったら、小さな自分が大きくなるほかはありません。志が卑しいままに、素晴らしい小説を書くことはできないのです。

これは別段、「立派な人間になれ」という意味ではありません。「立派な人」の書く小説なんて、きつと最高にツマライですからそうではなく、小説を通して読者に自分がどう見られるかを恐れなくて済む人間でありたいのです。

私は、陰惨なホラー小説ばかりを書いています。生まれつき腕がない不具者。病弱な薄命の美少年。受け入れがたい不条理な運命――。

「ありのままの自分」がどうしてもそういうものに惹かれてしまふのだから、それを一番に出してゆくほかはないのです。

書いていて楽しくないことは、一行だって、一文字だって書いて

はいけない。それが、自分の書いたものに責任を取るということではないでしょうか。

もちろん読者に対しても、気に入られようとして自分を枉げてはいけません。誰が、何をどう書いたところで、百人が百人に気に入られる小説などどうして書けるでしょう。全員の意見がぴったり合うことなど、決してないのです。

どう見られるかを気にするより、どんな批判を浴びようとも「これが自分だ」と言い切れる自信を持ちたい。しかし、そのためには自分を磨きたい。センスや好みが違うのは仕方ないけれど、無知や非常識をそしられたくはない。そのときのベストの自分を読者の前に出せなければ恐ろしくて裸の心を晒せるものではありません。

「私が書きたいのは私小説や純文学でもなければ、エッセイでもない。だからこんなことは関係ない」
と思うでしょうか。

自分自身と作品を別物ととらえるかもしれませんが、むしろ無意識に選ぶ言葉やストーリーにこそ「本当の自分」が出てしまうものなのです。それが怖い。だから小細工などせず、どこからどう見られてもたじろがぬ自分になるよりほかはないのです。

「小説とは、その人の内面をすべてうつし出す鏡である」

これは私が崇拜する作家の言葉です。実は私は今でも、「小説に映し出される自分」が恐ろしくて仕方ありません。だからアクセス数や評価ポイントに一喜一憂するし、寄せられる感想を読むのが嬉しくもあり、怖いのでしょうか。「どう見られてもたじろがない自分」になるためには、まだまだ修行が足りないようです。

与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール

今さら基本的な原稿の書き方について、くどくど述べるつもりはありません。『プロっぽい文章』でも申しましたが、改行ごとにマス空けるだの、カギ括弧の最後は「。」をつけないだのというのは、物書きにとって至極当然のこと、いわゆる文章の身だしなみです。

ただ、身だしなみやマナーというのは、正式なものを求めてゆくと実に細かく、「今さら誰もそんなこと気にしねえよ」というものまであります。

公募に出す原稿においても、本来は細かいルールがあります。ただ、これらを守ったところで、選考に有利になるようなことはまったくありません。今回はそんな「どうでもいいルール」を紹介します。

ワープロ書体を避け、正字で書く

正字とは、新聞類がようやく採用を始めた本来の漢字です。

・「類」↓「？」
・「啞然」↓「？然」
・「掴む」↓「？む」
・「嚙む」↓「？む」
・「顛末」↓「？末」
・「体躯」↓「体？」
・「蠟燭」↓「？燭」
・「壺」↓「壺」

と、まあこんなところでしょうか。出版されている本を見ればわかるとおり、ほとんどは正字が使われているはずです。ワープロ書体でもまったく問題はありますが、正字を使うことにより、より高い国語見識をアピールできるそうです。

（縦書きPDFでは、正字は文字化けしてご覧になれません。『なろう』に投稿の際は、むしろワープロ書体でないといけないようです）

禁則処理の体裁

禁則処理というのはわかりですね。行の冒頭に、句読点やカギ括弧の「閉じ」があつてはいけないのです。

これらはパソコンで執筆すれば自動で処理してくれるため、普段は特に気にすることはありません。

しかし、この禁則処理には二種類あるのをご存知でしょうか？

無理やり文字を詰めて句読点を入れる「追い込み」と、原稿の欄外に入れる「ぶら下げ」です。文芸出版物では「ぶら下げ」が一般的なので、応募原稿を印刷する際にも「ぶら下げ」とすることをお勧めします。

（『一太郎』の場合、「文書スタイル」の「体裁」で設定できます）

傍点

言葉を強調したいときに、文字の横に傍点を振ります。あまり多いと文章がうるさくなりますが、効果的に使えば非常に有効なアイキャッチャーポイントになります。

この傍点、『なろう』では黒点を使っている人がほとんどですよ

ね。応募原稿は明朝体で書いていると思いますが、本来、明朝体に振る傍点は、ゴマルビョ、、、、『です。些細なことで、これこそ選考にはまったく影響ありませんが念のため。

原稿用紙換算

公募の要項には、次のようなものがあります。

・原稿枚数及びフォーマット

400字詰め原稿用紙換算200枚から400枚。

データ原稿の場合の出力形式は、A4用紙ヨコにタテ書き、適宜の行間をとり、40字×40行で出力してください。

タイトルの横に、原稿用紙換算枚数をご記入下さい。

このような場合、普通は単純に一枚を原稿用紙四枚に換算します。つまり、 40×40 のフォーマットで百枚書けば、規定の原稿用紙換算400枚ちょうど。

しかしこれ、実際に原稿用紙と同じ 20×20 で置き直すと400枚に満たないのです。

いったいどちらが本当の枚数なのか？

答えは、「どちらでもよい」です。そもそも枚数規定というのはいい加減なものらしく、中には350枚までの規定なのに700枚の作品が一次を通過した例もあるのだから。

まあ、さすがにそれはやりすぎとしても、一割程度の規定オーバーは許されるようです。（もちろん規定枚数に満たない場合も）

ですから、「 40×40 を四枚分とする」としたら規定を越えてしまった、という場合は 20×20 での置き直しを根拠に、逆にちよつと少ない場合は「 40×40 を四枚分とする」を根拠に算出すればOKです。

変に書き加えて文字通り「蛇足」となるよりは、そのまま送ってしまった方がいいですね。もちろん、そのときは正直な原稿用紙換算枚数を書く必要はありません。規定枚数に収まらなくても、規定内の枚数を表記しておきましょう。

梗概って何？

たいていの公募には、1200字程度の梗概を添付するように指示があります。梗概とは、つまり「あらすじ」です。

『なるう』の「あらすじ」とは別物です。

「果たして彼の運命は！ 続きは本文をご覧ください」

なんていうのはいけません。ちゃんと最後まで書いてください。

例えばミステリーであっても、ネタバレを嫌がって

「○○の正体は実は で、それを知った●●に無理矢理×××

……！」

と、肝心なところを伏せ字にするのも御法度です。（なんですかつ、このヒワイなあらすじは！）

ちゃんと要領よく、原稿用紙三枚程度にまとめること。これも、「1200文字に空白は含めるかどうか」なんてことはどうでもいいです。文字数は、あくまで目安なので。

ちなみに、梗概を書くのが苦手という人。どうして苦手なのか教えましょう。（厳しいことを言います。泣かないでね）

それはずばり、「あなたが書いた小説は、1200字のあらすじを書けるだけの中身がない作品だから」です。

何ひとつ重要なシーンがないから、何をどう書けばいいかわからない。（はつきり言ってどうでもいいストーリー）自分で書いた梗概を読むと、あまり面白そうに感じられない。（間違いなくつまらない作品です）

だいたい、小説は書けるけどあらずじが苦手なんてあり得ないです。それは自ら「私は小説がヘタだ」と言っているようなものだからね。

梗概というのは応募前のやつつけ仕事になりがちですが、苦手な人は最初に書いてしまうのもひとつの手です。面白そうならあらずじが書ければ、きっと作品も面白いものができるのではないのでしょうか。

手書き原稿

今どき少数派だと思いますが、「応募はワープロ原稿に限る」という記載がない限り、原稿用紙に手書きで書いて応募してもOKです。ただし、選考には不利です。（どう考えたって読みにくいですからね）

手書きを理由に落選することはありませんが、よほど面白いものでない限り、読んでももらえないと思った方がいいです。それでもあえて手書き原稿で応募する人は、次のことに気をつけてください。

- ・丁寧な、読みやすい字で書く

字のウマヘタは関係ありませんが、殴り書きみたいな原稿はやめましょう。また、いくら達筆だからといって、草書で書き綴るのも控えてください。読めません。

- ・黒のペンで書く

鉛筆はもつてのほかですが、ボールペンも読みにくいのでやめましょう。必ず、「黒インクのペン」で。昔は「黒、もしくは青のペン」と言われましたが、今は黒に限った方が無難ですね。ちなみに鉛筆がNGなのは、何枚もコピーを取った場合に写らなくなるからです。

・修正箇所のある原稿を送らない

締め切り間際のプロの原稿じゃあるまいし、斜線で消して欄外に修正文を書いたような原稿を送りつけてはいけません。もうそれだけで読む気をなくします。

本来は修正液を使うのも不可。一文字でも間違えたら、原稿一枚全部を書き直してください。小説を書く者が、その程度の手間を惜しんではいけません。

応募原稿に限っては、手書きは百害あって一利なし。小説を書くなんてほとんどお金のかからない趣味だし、まして公募を目指すのなら、パソコンとワープロソフト、プリンタぐらいはそろえましょう。（あと国語辞典もね）

その他の注意点

・ページナンバー

原稿には必ずナンバーを振ってください。万が一バラバラになったら、誰にも元に戻せません。

・右肩を閉じる

原稿の右肩を閉じてください。紐で縛るなら、穴を開けてL字形に。ダブルクリップが無難です。厚くなりすぎる場合は二つに分けてもOKですが、必ずひとつの封筒に入れてください。リングはまとまりが悪いのでNGです。

・余計なものを添付しない

編集部への挨拶文は不要。設定資料やキャラクター紹介、世界地図も入れてはいけません。（そんなものを見ないと理解できない小

説を書くんじゃないよ。小説のことは全部小説の中で決着をつけるの！)

・ヘンな匂いをつけない

昭和のラブレターじゃあるまいし、まさかこっそり香水を忍ばせる人はいないと思いますが。よくあるのがタバコの臭い。封筒から出したとたん、「臭え！」と辟易することがあるそうです。これも読む気が失せるとのこと。気をつけましょう。

与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール（後書き）

今回の内容は、半分以上が『円城寺まどかがナンボのもんじゃい！』でお世話になった下読み編集者様の話が元になっています。「くだそうです。」「くらしいです。」と伝聞系の文章が多いのはそのためです。

また、これらはあくまで一個人の見解のため、原稿応募の際は主催者発表の要項をよくご確認ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128s/>

円城寺まどかの悪文排斥！

2011年11月15日11時51分発行